

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でぽら} 24

2003年
春夏号

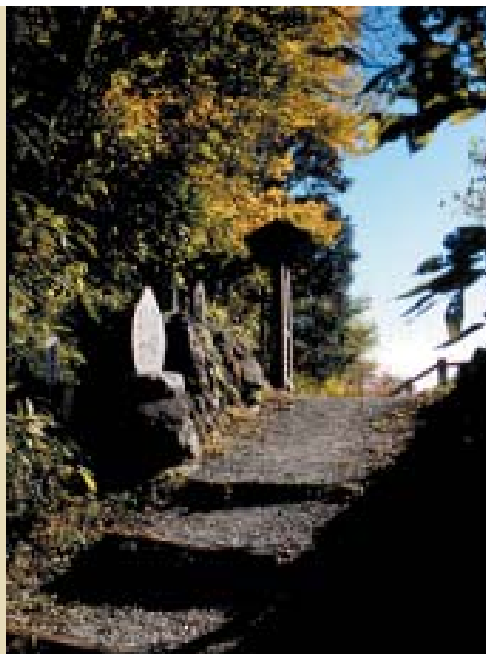
特集 歴史とロマン、先人たちの暮らしの道しるべ
街道を訪ねて



日

本各地には、かつて人々の往来で賑わった街道が数多くある。街道とは呼ばれない山中の小さな道にも、歴史的に重要な意味を持つ道があり、陸路の街道だけでなく海の道、川の道などもある。道はその地域の産業経済の発展、文化の交流、歴史的な舞台等として重要な役割を担い、地域特有の風土や歴史文化を育んだ。

一般に街道と呼ばれて現在も残っている道の多くは、道に沿って宿場町を形成し、そこ



信濃と遠州の国境にある
秋葉街道・青崩峠（長野県
南信濃村）

歴史とロマン、 先人たちの暮らしの道しるべ 街道を訪ねて 特集企画に寄せて

には商家、町家、旅籠、講中宿、本陣、関所さらに荷捌き場や厩などがあり、いまでもその面影を僅かだが残している。

また街道といっても、江戸と京都を結ぶ東海道、中山道のように大規模な幹線道路として歴史的にも明確で、史跡や家並みも比較的保存されている街道がある反面、山岳信仰の道、塩の道等は深い山道を往来していたため、いまではけもの道化したり山崩れ等で道が寸断し、当時の道を歩くのが困難なところ

もある。海を通して物資や文化が上陸した海の道や幻の道もある。さらに塩の道、サバの道、ブリの道などと呼ばれて地元の人から親しまれている地方道や、坂本龍馬ら土佐の志士達が駆け抜けて行った脱藩の道といわれる峠の道もある。これらのさまざまな道を通して、私達は実に沢山のことを学び、自然や歴史にも関心を深めることが出来る。

新しい道路が出来ると、地域は大きく変貌する。便利な広い道に沿って新しい住宅や企業、商業施設、住民の交流機関などが出来、人々の往来も変化してくる。その結果、旧道や旧市街地はさびれるが、古い街道と街並・宿場町保存という立場から見るとそれがラッキーだったケースも多い。

クルマを止めて、少し脇道を歩いて行くと、突然現われる古い家や蔵、雑貨店。そこには昔ながらの変わらぬ生活があり、のんびりお喋りを楽しむお年寄りの姿もあって我々を感動させた。しかしこの古い街や家がこれからも残り、お年寄りや子供の元気な姿が見られるのだろうかという不安がつきまとう。

で

「民家の保存と再生」特集に次いで、「街道」を集集することにした。街道には民家があるので、その保存や街並づくりについては22号と共通するが、22号と大きく異なるのは、道は一つの地域ではなく広域圏にまたがることである。街道を辿って行く、各々の集落や町村ならではの暮らしや取り組みに出会えるが、一方で、道を通じてその地域を取り囲む山や川などの自然と人々の暮らし、風土、広域的なつながり等が見えて

くる。折しもいま、市町村の合併問題が大きな課題として浮上ってきている。各地域の特色や歴史文化を守りながら、行政的には近隣町村が一つになって連係していくという新しいシステムがどうなるのかを心のどこかで考えながら、街道を走ってみた。

今回の取材では、過疎地域にあって昔の面影を残しながら、地域の人々がその保存や再生に熱意を持っているところをできるだけ多く取材した。民家や街並み保存では、重要伝統的建造物群保存地区」に指定されると改修等に助成金が出るが、街道の場合はそれが無い。しかし町村や商工会、住民たちが創意工夫し、古くて新しい魅力ある街並づくりや活気ある商店街づくりが情熱的に取り組んでいた。また自分達の生まれ育った土地と風土を心から愛して、その地域の素晴らしさを都市にも発信、地道な交流活動を行っている個人やグループにも沢山出会えた。

本号では全国各地にある街道のうち、過疎地域のほんの一部しか紹介できなかったため、過疎地域の街道を訪ねる特集は今後もまた継続して行いたいと考えている。次回は、クルマを捨てて昔の旅人と同じようにゆっくり歩いて取材したいと痛感している。

いつものことながら、各地で日本の原風景と考えるような素晴らしい自然や、こころ暖かい人々との出会い、歴史の舞台に遭遇したような感動があった。読者の皆さんもぜひ訪ねてほしい、クルマを止めて脇道へ入っていき、ゆっくり歩いてほしいと願わずにはいられない。

「でばら」編集部

(財) 過疎地域問題調査会

歴史とロマン、先人たちの暮らしの道しるべ—街道を訪ねて
特集企画によせて— 2

■歴史とロマンが息吹く道



▲脱藩の道・宮野々番所跡(栲原町)

龍馬・勤王の志士たちが維新を夢見て
駆け抜けた **脱藩の道**—— 4

(高知県栲原町、愛媛県河辺村)

川端風景が絵になる町は、武蔵初決闘の地
としても売り出し中 **因幡街道**—— 9

(兵庫県佐用町平福)

暖簾、桜並木、ウォーキング...ユニークな
試みで **出雲街道宿場町**を守る—— 12

(岡山県勝山町、新庄村、美甘村)

幻の中世都市が蘇る

十三湊と安藤一族盛衰の謎—— 16

(青森県市浦村)

キリシタン文化を脈々と受け継ぐ

天草街道—— 18

(天草下島・熊本県天草町、河浦町)



▲暖簾のある宿場町(勝山町)



▲上州姫街道沿いのネギ畑で
(下仁田町・竹内匡一さん)

◀川端風景が絵になる町
(佐用町平福)

古街道に連なる六つの宿場町

山中七ヶ宿街道(宮城県七ヶ宿町)—— 21

文人往来、江戸幕府の天領—

妻入りの街並 **北国街道出雲崎宿**(新潟県出雲崎町)—— 24

欄干付きの養蚕農家が連なる国境いの道

中山道の脇往環 [上州姫街道](群馬県下仁田町、南牧村)—— 27

信濃と遠州を結ぶ信仰と塩の道

[秋葉街道] に日本の原風景を見た—— 30

(長野県高遠町、長谷村、大鹿村、上村、南信濃村)

過疎連盟/(財)過疎地域問題調査会からのお知らせ—— 35

編集後記・奥付—— 35

日本の原風景に
出会う街道

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。わが国の過疎市町村の数は1296(過疎地域市町村1210と過疎地域市町村に準ずる特定市町村86の合計)、全市町村の40%にも達しています。過疎市町村は豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、交流をすすめるために、過疎地域と都市地域を結ぶホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として、“DePOLA でぼら”をお届けします。回覧し、多くの方にご高覧いただければ幸いです。

[写真]表紙

左上/秋葉街道・下栗の里(上村)急斜面で働く老人
左下/因幡街道(佐用町)武蔵初決闘となった場所
右上/妻入りの街並が連なる北国街道出雲崎宿
右下/キリシタン文化を受け継ぐ崎津天主堂(天草町)
中/坂本龍馬ら脱藩の道(飛翔の像)(河辺村)

- ▶龍馬や土佐勤王党の志士らが脱藩していった道（栲原町）
- ▼上／三嶋神社の脇にある脱藩の道
- 中／河辺村「御幸の橋」脇にある脱藩の道案内板
- 下／泉ヶ峠（五十崎町）脱藩の道。龍馬らはここで一泊した



龍馬・勤王の志士たちが 維新を夢見て駆け抜けた 脱藩の道

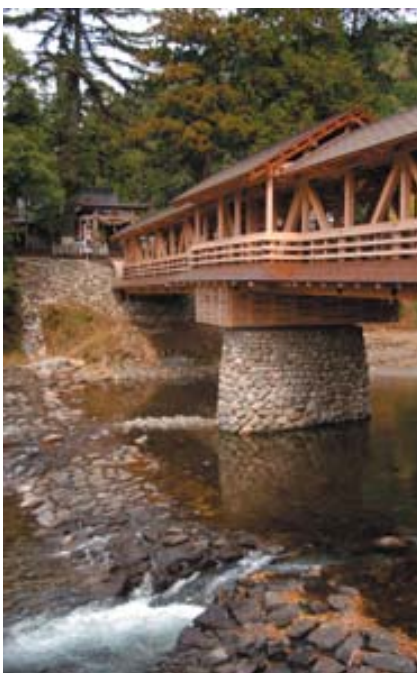
高知県 ゆすはらちよう 栲原町 かわべむら 愛媛県 河辺村

坂本龍馬をはじめ、土佐勤王党、天誅組、忠勇隊に参画した栲原出身の志士たちは、維新を夢見て決起し、国の未来を創るという使命感に燃えながら野越え、峠越えして脱藩していった。志士たちの多くは志半ばにして非業の死を遂げたが、彼らの志や行動は明治維新に一石を投じ、我々現代人の心をいまも捉えてやまない。

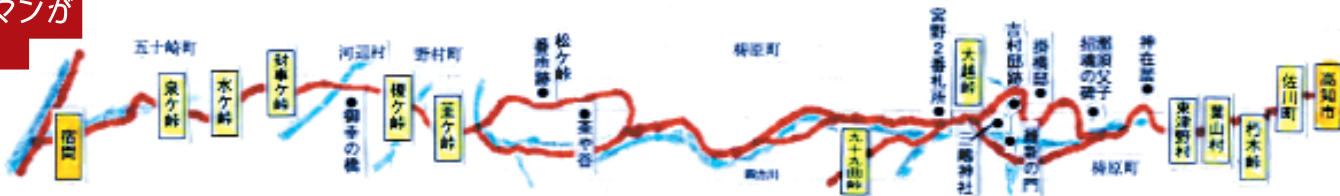
早春3月、龍馬らが脱藩していった道は、今はもうケモノ道化したところもあるが、栲原には志士たちの関連史跡も数多く残っている。道は平成14年に14市町村による協議会が発足、連携して「龍馬脱藩・ゆかりの道」として広域的に整備復元、イベントも開催していくことになった。土佐勤王党の拠点だった栲原町と、脱藩の道等で交流事業を開催し村おこしの一助にしている河辺村取材した。

「津野山文化」を育んできた栲原

栲原町（人口4506人）は高知県中西部に位置し、北は四国カルスト台地、西は兩包山、高研山、地藏山など1100m級の山が連なる山系で、愛媛県との県境になっている。これらの山から流れ出す清流は、四万十川最大



◀三嶋神社に架かる屋根付き橋



和田城の庭に建つ志士たちの像。龍馬は右から2人目

の支流・梶原川、四万川、北川を形成し、河川にそって集落が形成されている。四季折々の変化に富んだ台地を、町は「日本でいちばん元氣の出る」雲の上のまち」と称して、ユニークな施設や活動を次々と手がけて、全国から注目されている。

その代表的なものが「維新の道」「脱藩の道」、全国でもいち早く制度化した千枚田オーナー制度、津野山神楽や各種イベントだが、今回数年ぶりに訪ねると、太郎川公園に新たに「雲の上の施設群」、四国カルストには風力発電施設などがお目見えしていた。

梶原町と「脱藩の道」は司馬遼太郎『街道をゆく』でいち早く紹介されたことで全国的に知名度を高めた。司馬遼太郎は坂本龍馬らが脱藩していった村々、谷の大きさ、千枚田に大変感動し、そして梶原の人々の

人情や上品な言葉遣いを「梶原は、ほとんど桃源境といつてもいいような僻地でありながら、教養の伝統がある。」と記している。(梶原街道「脱藩のみち」＝街道をゆく27)

町を訪れたのは晩秋の日曜日。町では産業祭、文化祭が開催され、神在居地区の千枚田では天日干ししていた稲を脱穀して新米を手渡す今年最後の交流会が行われていた。

多忙な中を案内してくれたのは生涯学習課の川上寿久課長補佐。津野山神楽保存会事務局も担当している。

最初に訪ねたのが三嶋神社。昨年3月に2億円かけて梶原川に杉の大木を使った屋根付きの橋が竣工した。宮大工の技を駆使した橋は神社への参道としての新たな役割を担っている。おこなな気分が境内へ入ると、樹齢400年のハリモミの木等が茂り、その奥に津野山神楽を奉納する神社社殿と舞台がある。

延喜13年(913)、京より津野経高が梶原へ入国したことで、京と融合した独自の文化が生まれた。中でも神楽は1100余年の歴史を今に伝える荘厳な舞いで、戦時中に廃れかけていたが昭和23年に津野山神楽保存会が設立されてから、町民をあげて保存する気運が高まり、現在も各地区より推された人たちを中心に伝承され、年数回上演されている。

神社境内森林古道に「脱藩の道」があった。手前の街道には龍馬の脱藩を手助けした那須俊平・信吾父子の屋敷跡、掛橋和泉邸や吉村虎太郎邸跡もあり、龍馬は彼らの案内で三嶋神社の脇から山に入り梶原川を越え、大越峠、宮野々番所、そこから四万川にそって北上、葎ヶ峠へ向かって行った。梶原の志士・吉村虎太郎らは宮野々番所より九十九峠を越えて行ったといわれ、深い山中にひっそりと石碑が立っている。

脱藩した龍馬と 梶原の志士たち

梶原の歴史民俗資料と住民交流施設として利用されている和田城の庭に8人の志士たちの銅像が建っている。江戸方面を見て脱藩を決意し駆け出す姿をリアルに描いた銅像だが、のちに不遇の死を遂げたせいも、切なさも伝わってくる。



案内してくれた川上寿久さん

資料によれば、坂本龍馬は同志澤村惣之丞とともに文久二年(1862)3月24日に高知を出発し、25日に梶原に到着した。その夜勤王の志士那須俊平・信吾父子の家に泊り、翌26日未明に俊平・信吾父子の道案内で宮野々番所や茶や谷、松ヶ崎の番所を抜けて伊予の国へ脱藩した。信吾は葎ヶ峠より引き返したが俊平は同行し、水ヶ峠(河辺村)を経て泉ヶ峠(五十崎町)に宿泊、宿間から川船で長浜へ出た。その後龍馬は勝海舟舟に啓発

梶原町内には茶堂が13カ所。「寄っていかんかね」とお年寄りが声をかけてくれる



神在居千枚田ではオーナーたちとお米の脱穀作業。お昼にはもてなしの皿鉢料理に舌つづみした



され維新の指導者として活躍するが、慶応3年11月25日京都近江屋で刺殺された。梶原の大庄屋・吉村虎太郎をはじめとする志士たち10余名は京に上って天詠組を組織して幕軍と戦うが、20代半ばにして皆壮絶な戦死や自決をしている。掛橋和泉のように脱藩はしないが彼らを援助したことが養母の知るところとなり、同志に類の及ぶことを恐れて自決した人もいる。銅像になった8人は家も裕福で武芸も優れていたが、都に糧を求める

しかない下層の武士もいたようだ。しかし脱藩により藩の保護は受けられず、「新撰組にとつて土佐人は斬り得」「かれらは幕末のほとんどの事件現場で屍をさらした」と司馬遼太郎は書いています。

龍馬や勤王の志士たちに限らず、学問を身に付けると若者は出ていくもので、いつか地域は活力を失い過疎化が始まる。その傾向はここ高知県では江戸時代末期から始まっていたのだからかと思ひながら、「脱藩の道」を歩いてみた。

紅葉した森はため息がでるほど美しいが、訪れる人もなく舞い落ちる木の葉の音だけが聞こえる静寂の世界。龍馬らが脱藩して行った時は、残雪があるものの雪解けのせせらぎや野鳥が春の喜びを語りかけ、彼らはいつか夢を果たして故郷に錦を飾って帰ると胸躍らせて駆けていったに違いない。

農民としての誇りを伝える

神在居(かんざい)の千枚田へ出かけた。昨日は季節外れの初雪に見舞われて脱穀作業が中断、関西からやってきたオーナー達は一日滞在を延して作業に参加、地域のお母さん達のもてなす名物・皿鉢料理に舌つづみしながら昼食を楽しんでいた。

平成4年に千枚田オーナー制度を開始、四万十川の名前にちなんで1000㎡4万1000円でオーナーになれるというアイデアも受けて棚田活用交流事業の先駆けとなり、全国棚田千枚田サミットが始めて開催された地区。12世帯、27人がこの棚田を守り続けている。「オーナー制度を設けても棚田の保存は大変なのが現状ですが、ここは10年来家族のように通つてきてくれるオーナーが多く、私達も農民としての誇りを持ちながら保存に取り組んでいます」と世話人代表の新谷忠夫さんは

語る。宿泊休憩のための交流施設等は町が作ったが助成金はゼロ、事業は助成を受けず地区の人たちが独立採算で行っているというから素晴らしい。

兵庫県からやってくる夫妻は「田で収穫したお米はそのままもらえる上に年2回美味しい天然蜂蜜や野菜等を送ってくれて、来るようにして皆でもてなしてくれます。定年後はここに住みたいと思っています」と言う。

昨年オーナーの一人、田村俊夫・紀代美夫妻が1才の子供を連れて松山から移住してきた。俊夫さんはコピーライター。隣接する町営住宅に住み、農業を手伝いながら、仕事をしたいと言う。一年間研修に来ているという若い行政マンもいた。

我々が宿泊した農業体験民宿「いちよのの樹」も農民の哲学と誇りを持つ心意気に溢れた一家だった。米から野菜、山菜まですべて



▶古い民家を移築した「くさぶきの里」。主婦たちの手で田舎体験料理を提供している
▼農業体験民宿「いちよのの樹」のみなさん。下は知子さんのヘルシーで美味な手作り料理



自家栽培。その素材を使って奥さんの上田知子さんがバラエティーに富んだ手料理でもてなしてくれる。目の前の山はワラビ、ゼンマイの宝庫で、毎年山菜取りの体験客が押し寄せる他、乾燥したゼンマイ、大粒銀杏、干し椎茸等は土産品として人気もの。宿泊は昔ながらの農家の座敷をそのまま活用、食事はご主人の和弘さん手作りの囲炉裏を囲み、穫れたての川魚の炭火焼きも加わる。

「自然の恵みを受けて暮らせることに農家であることの素晴らしをしみじみ感じます。来てくれた都会の人たちにも農家の生活が味わえると喜ばれ、最近是小中学生や女子校生たちも増え、毎年来てくれるようになりました」知子さんは津野山女性部・若葉会のメンバーたちと「焼肉のたれ」等を商品化、県の女性リーダーとして表彰されている。20haの森林を持つ上田家では和弘さんが環境保全の立場で持続可能な森林経営をめざして、森や河川の保護活用にも熱心に取り組んでいる。長女の美早希さんも高校を出たら農業と民宿を手伝うつもりだという。

もう一つ橿原の風土と人柄を象徴しているのが茶堂群。木造平屋建て、茅葺き屋根、板敷きの素朴な小さいお堂で、現在13棟が保存されている。弘法大師、孝山豊、三界万豊を祭るため慶長9年に各地区に建立されたもので明治には53棟あった。現在は保全されながら道行く人々の接客やお年寄り、子供達の交流の場に活用されている。茶堂を撮影していると、お年寄りがやってきて「お茶飲んでい

かんかね」と声をかけてきた。



（河辺村） 脱藩の道は榑原町の葎ヶ峠、櫻ヶ峠（野村町）を越えると、伊予の河辺村に入る。村北部をほぼ東西に横切る道で、約15kmの道程を徒歩3時間程かけて龍馬らは3月26日の昼間通り抜けて行った。そしてその夜は、村境を過ぎた泉ヶ峠（五十崎町）で脱藩後はじめて一泊している。

河辺村を龍馬らを通ったことはずっと村民も知らなかったが、郷土史家の調査によって15年前に判明した。村では村長ら有志155人で「脱藩の道保存会」をつくり、道の保存・整備、案内板の設置等を行ってきた。そして平成元年より「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」のイベントを実施してきた。毎年9月の第2日曜日、全国からやってきた人たちは半日かけてその道を歩き、また講演会や

村民総出でもてなす手料理を楽しむ。昨年で14回となったこの催しには平均300人が参加し、村の大切な行事になっている。

そのために住民が草刈りをし、場所によっては砂利を轆いたり木の階段を設けて歩きやすくしているが、現代人にはかなりきつい山道だ。かつては行商の人たちが通ったという道だが、近年は廃道同然となっていた。

河辺村（人口1358人）は肱川河口から約45km遡ったところにあり、雨乞山（1213m）をはじめ東北西を1000m級の山岳稜線に囲まれている。83%が山林で、耕地は全体の5・7%という典型的な山村である。しかし村の中心を流れる河辺川、木菱川と周辺の山々の美しさは格別、その中に龍馬に因んだ歴史文化施設や交流施設が設置されている。

村内を案内してくれたのは田中弘さん（62）。役場職員の息子さんが出張のため、農業の手を休んで駆けつけてくれた。脱藩の道



◀上/坂本龍馬脱藩之日記念館と公園に建つ銅像
下/紅葉が美しい「御幸の橋」
▶村内を案内してくれた田中弘さん



右 / 上から大正2年開設の三嶋橋、
民家にかかる豊年橋、平成4年に架
けられたふれあい橋
左 / 「夜明けの道」記念碑



保存会のメンバーとして毎年山に入って草刈りや林道の整備も手伝っている。

まず訪れたのが龍馬と志士たちの資料を展示し、脱藩という緊張感をリアルに体験できる「坂本龍馬脱藩之日記念館」。せせらぎの遊歩道と調和した農家風

資料館で、隣接して龍馬の生家「才谷屋」を名乗る宿泊施設、前の公園には龍馬、那須俊平、澤村惣之丞の3人の飛翔姿の銅像もある。

その先に建つのが廃校を再利用して作られた村営宿舎「ふるさとの宿」。河川敷きや、裏山はふるさと公園として整備され、手入れされた木々の中に遊具施設や遊歩道等が設置されている。懐かしくて新しいこれらの施設や「歩こう会」のイベントで、村には年間3万人が訪れるようになった。

「人口1400人の村に3万人訪れるというのは凄いことですね。もっと年間を通じて来てくれると農産物の加工などにも張り合いが出ますが、脇川から村にくる道路が狭い。ダムを作ることでバイパスを通すという話も

ありますが、私は清流と屋根付き橋などを大切にしていきたい方が多いように思います」と田中さんは言う。

深山霊谷に架かる 屋根付き橋

続いて訪ねたのが河辺村名物・屋根付きの橋。米国の「マディソ

ン郡の橋」は小説・映画化で世界的に有名になったが、多分その橋以上に美しいと思われる歴史のある橋が村内には現在8箇所ある。川にそって道と家が建つ山間の地形では橋が重要な役割を担う。川の上にかかる橋のスペースは、村民が語ったり農産物をちよつと置いたり、洗濯物を干したりと、多目的に活用できる。そのために屋根をつけたのだらう。先人達の知恵の素晴らしさ、そして橋を保全活用しながら風や水、雨、木々らの自然と共生してきた村人たちのやさしい暮らし。橋の周りには全山紅葉真只中で、見事な赤や黄色に染まった古木たちが橋を彩っていて、深山霊谷の情緒を堪能した。

8個ある橋のうち、平成になって建て替えられた橋3個を除くと、明治、大正、昭和20年代に架けられた橋で、川の幅や民家に合わせてそれぞれ個性的。中でも脱藩の道と関係深い「御幸の橋」は、安永2年（1773）に天神社創設時に架けられた橋で、明治19年に洪水で流失したが、祭礼に合わせて氏子総出ですぐ再建したという最も古い橋で、県の有形民俗文化財に指定されている。「周辺には古い貴重な木が多く、ここには神が宿っていると皆が大切にしているんです」と田中さんは言いながら、橋の先に伸びている脱藩の

道に案内してくれた。

龍馬が脱藩して行った道は尾根伝いが多いが、途中で河辺川に出る。そこが「御幸の橋」で、多分この清流で喉を潤し汗を拭い、天神社に詣でたあと、再び尾根の方に登って行つたに違いない。

当方も真似てその道を歩いてみた。鬱蒼とした人工の杉林、昔はクヌギやナラ等の林だったろうかと思いつながら20、30分歩くと、明るい丘の上に出た。集落がありユズ畑で老人が働いている。伊予方面が一望できる場所ので、龍馬研究家の第一人者・村上恒夫の「夜明けの道」と記した石碑が建っている。

昼食は「あまごの里」で、捕れたてのアマガゴの刺身と川魚の甘露煮に舌つづみ。御幸の橋の上流にあり、豊かな清流を生かしてイワナやマス等を養殖して食べさせてくれる宿が数軒ある。産卵・孵化から飼育、料理まですべてを手がける梅木正さん（56）は、大阪からUターンして父親の経営する民宿を引き継いだ。20年のキャリアを持ち、遠方の町からも食事に訪れる人が多いようだ。

別れ際「村の発展には農業林業をどうするかが一番の問題です。山間部という自然環境を生かして付加

価値の高い独自のものを生産して観光にも生かしていきたい」と語った言葉が印象的だった。

文 / 浅井登美子
カメラ / 小林恵



・ 栲原町商工課 ☎0889 (65) 1111
・ 河辺村総務課 ☎0893 (39) 2111

「あまごの里」の梅木さん



土蔵の影が川面に揺れて美しい、平福の川端風景

歴史とロマンが息吹く道

川端風景が絵になる町は 武蔵初決闘の地としても売出し中 因幡街道 兵庫県佐用町平福

因幡街道は、因幡の国（鳥取県）と播磨国（兵庫県）を結ぶ道。その街道随一の宿場町として栄えたのが佐用町平福だ。400年前と変わらぬ美しい川端風景を残すこの小さな町は、今、「宮本武蔵初決闘の地」として注目を浴びている。

鳥取藩主が参勤交代で通った道

平福の集落に足を踏み入れたとたん、ひと昔前の世界にさまよいこんだような、不思議な感覚に包まれた。町並みが、そのまま時の流れを止めてしまったかのように、ひっそりと静まり返っているのである。

中国自動車道佐用ICから国道373号線を北へおよそ5分。兵庫県の中西部、岡山県との県境に位置する佐用町（人口8687人）平福は、かつて、因幡の国（鳥取県）と播磨の国（兵庫県）をつなぐ因幡街道の宿場町として栄えた。1・2キロの旧街道沿いには、古い商家や土蔵が並び、往時の繁栄をしのげている。

佐用町歴史的環境保存審議会の会長であり、旅館「河内屋」を経営する原田昇さんは、「因幡街道が本格的に整備されたのは近世になってからです。寛永12年（1635）に参勤交代の制度が敷かれ、鳥取藩主池田氏の一行がこの道を通ることになったのです。平福の町には本陣が設けられたため、街道の宿駅として、とても栄えたんですよ」と話す。



上 / 利神城跡
下 / 利神山中腹から見た平福の町並み





佐用町歴史的環境保存審議会会長の原田昇さん

築400年の瓜生原家は、町屋の特色をよく備えている(上)。下は旧街道で見つけた鏝絵のある建物



藩主は2年に一度、領国と江戸を往復しなければならなかったが、鳥取藩は初代以来、178回も往復したというから、街道の整備は徹底して行われたにちがいない。そして、流通の面でも、物資の中継地、市場町としての役割を担い、平福は街道最大の宿場町に成長した。

「この地方に伝わる里謡の一節に、『大原夜出て釜坂越えて、花の平福朝駆け』という唄があります。あまりに賑やかな宿場町だったので夜を徹してしまっただと唄っているんですね」

しかし、昭和10年の姫津線(現在のJR姫新線)の開通で、交通の中心が佐用町周辺に移り、平福の町は次第にさびれていく。町はいつの時代も、道によって、その盛衰を左右される宿命にあるようだ。けれども、町民たち

の悲願が叶い、平成6年に鳥取・岡山と神戸・京都方面を結ぶ智頭急行が開通。また、国道373号線沿いに「道の駅」が開設されると、人と物資の流通が活発になり、今また、活性化への兆しが芽生えてきた。

原田さんいわく、「この芽を大きく育て上げ

ることが、21世紀に生きる私たち地域住民の務めだと考えています」。

絵になる古い町並みと川端風景

平福は、400年あまり前、姫路城主・池田輝政の甥、池田由之が築いた城下町だった。町を見下ろす利神山(373m)の頂には、三層の天守閣と城郭をめぐらせた見事な山城がそびえていたという。

早朝、利神山の山頂をめざした。この地に初めて城が築かれたのは南北朝時代、赤松一族の別所氏によってである。その後、関が原の合戦の後に、池田由之が利神城主となり、佐用一円を治めた。由之は慶長5年(1600)に三層の天守閣を誇る利神城を建造。その麓に武家屋敷や町人町を設け、整然とした城下町をつくりあげた。それが、この平福の町なのである。

ちなみに、由之の建てた城は、その後、すぐにこの世から姿を消すことになる。姫路から城を見に来た輝政が余りの壮大さに驚き、「我に謀反あり」と、取り壊しを命じたことが、秀吉の一国一城の令によって取り壊しを命じられたとかわいられているが、真偽のほどは定かではない。

さて、急な山道を登る途中、平福の街を一望する場所があった。国道373号線と旧因幡街道、そして佐用川が並行して南北に走り、それらに沿うように集落が細長く広がっている。江戸時代には、佐用川を掘に見立て、川の内側(東側)に武家屋敷、外側(西側)に町人の住まいがあったという。

中腹から眺めると、佐用川沿いに建つ商家の屋敷と土蔵が川面に映り、まるで絵のような光景だった。全国に古い町並みは数あるが、これほど美しい景観をもつ場所は少ないだろう。映画「槍の権三」の舞台になって以来、観光客が増えたというが、それでも、静かですっきり

とした風情は少しも損なわれていない。

川座敷のある平福独特の建築物を公開

原田さんに旧街道に沿った町並みを案内してもらった。

「現在、平福の戸数は150戸ほどですが、江戸時代には倍以上の戸数があったそうです。わずか1・2キロのこの街道沿いに、呉服屋、居酒屋、雑貨屋、乾物屋が軒を並べ、鍛冶屋や提灯屋、傘、下駄、畳など手作業の製造販売の店や髪結い床まであったそうです。宿屋にいたっては、天保10年(1840)に共倒れを恐れ、12軒しか建ててはいけなかったという御触れが出たほどです。そのことから、いかに繁栄していたか伺い知ることができそうです」

ちなみに、現在、街道筋にある店は、明治21年創業の旅館「河内屋」と、元禄年間創業



街道筋に昔ながらの構えを見せる「たつ乃屋本店」。三年熟成した「三年醤油」はコクのある味わいだ



本陣跡。陣屋跡をイメージした
木造本瓦葺の建物



の醤油屋「たつ乃屋本店」だけ。それ以外は
民家になってしまった。街道筋に昔ながらの
構えを見せる「たつ乃屋本店」は、姫路の殿
様（池田侯）が町を発展させるために、本
場・竜野から職人を呼んだのがはじまりだと
か。今でも地元丸大豆を使い、3年寝かせ
た手作りの味を守っている。

街道の両側には、塗り込めの虫籠窓、千本
格子、なまこ壁などの家々が建ち並んでいる。
「播州系と作州系の家並みが混在しているの
が、この町の特徴なんです。昭和58年に佐用
町歴史的環境保存条例が制定されて以来、町
並み保存に力を入れてきました」

と原田さん。平福でも指折りの豪商「瓜生
原家」の内部を見せてもらった。鋳物業を営
んでいた瓜生原家は築400年。家のつくり
は、平福ならではの母屋があり、中
庭があり、川に面して蔵と川座敷が建てられ
ている。実は、今朝、山の中腹から眺めた川
座敷と蔵は、この家のものであったのだ。川座
敷の横の通路を抜けて、門を開けると、川へ
降りる階段があった。昔は、ここで米を研い
だり、野菜を洗ったりしていたそうだ。
「平福の風情は、佐用川の川端に石垣を組ん
で建つ川座敷と、石造りの洗い場に代表され
ます。夏の川座敷は、佐用川の涼風が来客を
もてなし、雪の川端風景は人々の目を楽しま

せてくれたものです」

原田さんによると、瓜生原家の見学につい
ては、現在は通り抜けただけだが、町おこしの
一環として、将来的には部屋の中もすべて開
放する予定だとか。

義母を慕って、武蔵が歩いた道

平福は、剣豪・宮本武蔵ゆかりの地として
も知られる。今年、HNKの大河ドラマで
「MUSASHI 武蔵」が放映されるため、
町をあげてPRに余念がない。原田さんの話
では、武蔵のふるさととは、平福の北方およそ
10キロのところにある大原町宮本村（岡山県）
だといわれているとか。

武蔵は、父・平田無二斎と母・お政の間に
生まれたが、幼くして母と死別。無二斎は後
添えに、平福の利神城主・別所林治の娘よし
子を迎えた。

「ところが、武蔵7歳の時、父がこの世を去
り、義母よし子は武蔵を残して平福へ帰り、
武士・田住政久に再嫁

するんです。義母にな
っていた武蔵は、会
いたい一心で大原から
平福まで10キロの道の
りを辿って、よし子の
後を追ったといえます」

大原から国境の釜坂
峠を越えて平福に至る、
10キロの道のりは、少
年の日の武蔵が歩いた
「母恋街道」でもあった
わけだ。

平福と武蔵の因縁は
まだまだつづく。9歳
の頃、武蔵は、平福の
正蓮庵の僧・道林坊の

もとに預けられ、学問を学ぶこととなるのだ。

「武蔵が、水墨画や庭園作りなど諸芸に優れた
力量を発揮したのは、幼少期に師と仰いだ道
林坊の影響が大きいといわれているんですよ」
その正蓮庵は、平福資料館の前の道を西へ3
キロほど行った山裾にひっそりと佇んでいた。

そして、武蔵13歳の時、初決闘を行う場所は、
旧因幡街道と国道が分岐する金倉橋のたもと
と。相手は新当流の達人、有馬喜兵衛だった
が、武蔵は一刀の元に倒したと伝えられる。

数々のドラマを生み、町の盛衰を見守って
きた旧街道は、今、時の流れを止めてしまっ
たかのようにひっそりとしている。しかし、
観光客の手垢に染まらず、今なお、静かで美
しい町並みを残すことができたのは、この町
にとって、実は、とてもラッキーなことだっ
たのかもしれない。できることなら、このの
んびりとした雰囲気をつつまでも損なわない
でほしい。そう願いつつ平福を後にした。

文/小田礼子 カメラ/小林恵

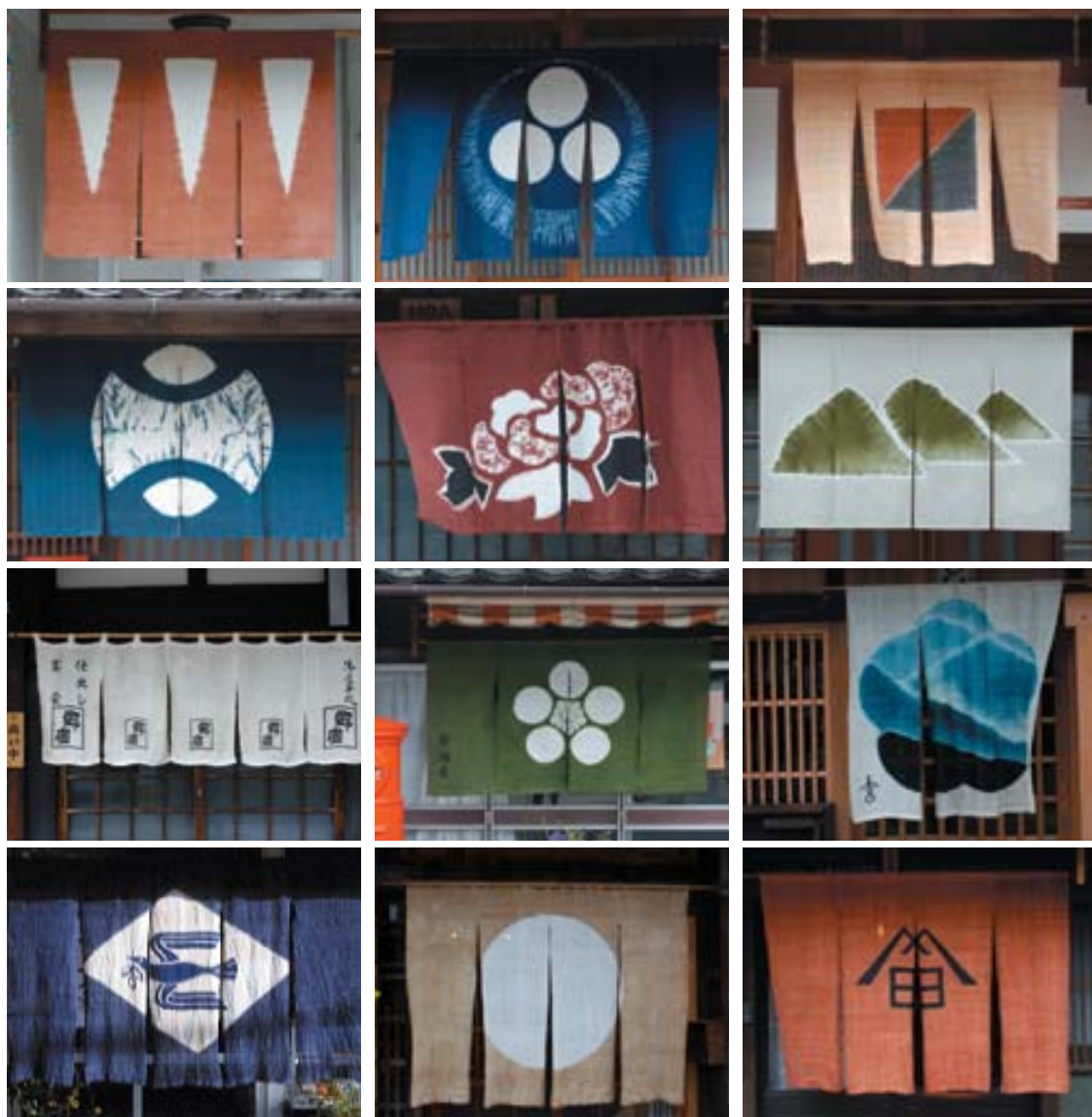


幼くして父母と死別した武蔵が預けられた平
福・正蓮庵（右）。宮本武蔵の初決闘の場
である金倉橋のたもとは、六地藏が立つ

佐用町役場産業課
☎0790-82-2521



出雲（島根県）と美作（岡山県北部）を結ぶ出雲街道は、山陽道を経て大和（奈良県）方面に通じる交通路として、古くから重要な役割を果たしてきた。険しい中国山地を縫うようにつづく街道には、勝山、美甘、新庄といった雰囲気のある宿場町が残っている。“暖簾の町”として注目される勝山町、桜並木が親しまれている新庄村、そして街道ウォーキングを開催する美甘村……。それぞれの試みで町並み保存に取り組む、地域の人々取材した。



勝山町の町並み保存地区には、70軒以上の軒先にのれんが掛かっている。商いのシンボルや家紋を染め抜いたデザインから、何屋さんかを想像しながら眺めるのも楽しい

暖簾、桜並木、ウォーキング： ユニークな試みで出雲街道を守る

岡山県 勝山町、美甘村、新庄村



“のれんの町”の仕掛け人、行藤公典さんは、町並み保存事業を応援する会の会長でもある
 勝山ののれんづくりを一手に引き受けている加納容子さん



暖簾が新たな町のシンボルに！

岡山県の北西部に位置する勝山町(人口9379人)は、三浦藩二万三千石の城下町、また、出雲街道の宿場として栄えた町である。昭和60年に岡山県下で初めて「保存地区」に指定された美しい町並みで知られるが、ここ数年、注目を浴びているのは「暖簾」。およそ800メートルつづく旧街道沿いの家々が、個性あふれる暖簾で彩られているのである。

白壁に格子窓、灯籠のある古い町並みに、色鮮やかな暖簾が揺れる様子は、なんともいえぬ風情がある。しかも、そのデザインがまたとてもユニークときている。たとえば自転車屋さんなら車輪のデザイン、クリーニング屋さんにはアイロンの図案、また、一般家庭の場合には家紋のデザイン……という具合。それが話題になり、「暖簾の町」というキャッチフ

レーズでマスコミに取り上げられて、いつしか、たくさんのお客さんが訪ねてくるようになったという。

町並み保存事業を応援する会会長の行藤公典さんによると、

「きっかけは平成7年の夏、うちの事務所が日差しの照り返しで眩しいものだから、近くに住む染色家に暖簾を4枚染めてもらったんです。それを1年間掛けたら、観光客や近所の人に評判がよかったです。町おこしの一環として補助金の申請をしました。あとは、知らない間にどんどん広がっていったって感じなんですよ」

ちなみに、暖簾を1枚作るのに費用が4万5千円かかる。そのうち、町からの補助金が1万5千円、町並み保存を応援する会からの補助金が1万円、残りの2万円が本人負担となる。それでも希望者が続出し、今では70軒以上の家が暖簾を掛けるようになったとか。

「暖簾の効用は、ほかにもあるんですよ。一人暮らしのお年寄りのお宅で、朝、暖簾が出てないと、病気になるのでは？と近所の人が見に行きようになっちゃったんです。暖簾は、町の人同士のコミュニケーションに役買っているんです」

それにしても、立派な「箱物」を建てても、なかなか成功しない町おこしが、小さな布キだけで成し遂げられたとは、驚きだ。「予想外の展開だった」と謙遜する行藤さんだが、他にも、鍛冶屋だったところを改造して無料休憩所をつくったり、旧家の雛人形を公開する「雛祭り」を企画、成功させるなど、なかなかのアイデアマンのようだ。

町を変えた「布の力」

暖簾を染めた草木染作家、加納容子さんの工房も町並み保存地区にあった。

仕事場とギャラリーを兼ねた「ひのき草木染織工房」は、およそ240年前に建てられた酒蔵を改造したもの。造り酒屋を営んでいたこの家に、加納さんは生まれ、高校生の頃まで暮らした。その後、東京の美大で学び、草木染めや織物の技術に魅せられたという。暖簾のデザインについて尋ねたら、



▲勝山の町の移り変わりを静かに見守ってきた、出雲往来の道しるべ

▲上 / 百六十石の家老格だった渡辺邸。館内には武家に関する資料が展示されている
 下 / 秋田自転車店のご主人と人力車。車輪のデザインが映えるのれんの前で





町裏の旭川畔に今も残る高瀬舟発着場。「後姿の美しい町」と称されるように、川側から眺める町並もすばらしい

希望を聞き、その店(家)の個性を表すようなデザインを考えます。通りを歩いていると、私が染めた暖簾が掛けられているでしょ。嬉しい反面、気に入ってもらえてるのかなあと、ちよっぴり心配なんですよ」

と、こちらも謙虚。でも、暖簾を掛けるようになって、他所から来た人から、町が新鮮になったねと、ほめられることが多いという。「勝山は二百数十年の歴史を持つ城下町なんです。そのため、昔は武士商法というか、堅苦しくて、冷たい感じがすると言われていたんです。ところが今は、暖簾が、よく来てくれたねと言ってるみたいだ。これはひとえに、布の力」です」

そういわれて、もう一度通りを歩いてみる

と、確かに暖簾の存在感は大きい。風が吹いたり、人がくぐったりするたびに揺らぐ、布の動きや柔らかさが、町並みに人の息づかいを与えているのだ。

では、これから勝山をどんな町にしたいですか？と加納さんに問いかけたら、即座に、「住んでいる自分たちが楽しんで暮らしていける町にしたい」という答えが返ってきた。うわべだけ綺麗でも、人間の息づかいの感じられない町はつまらない、と。

「土産物店が建ち並び、観光客がいっぱい押し寄せるような町にはなってほしくないんです。お金はなくても、お父さん、お母さんが工夫しながら楽しそうに暮らしていたら、子供たちは、人生っていろんな生き方ができるんだなあ、と感じると思っています」

そんなふうには、町づくりに対する思いを淡々と話してくれた加納さん。やはり、素敵だと感じる町には、ちゃんと理由があって、結局は、それをつくっているのは、「人」なのである。

往時を偲ばせる高瀬舟発着跡地

勝山町の中心は、南流する旭川と、その支流で東に流れる新庄川の合流点に開けている。このロケーションは、勝山という町にとって重要な意味がある。中世から近世にかけて、旭川は南北を結ぶ重要な交通路だった。高瀬舟による物資の輸送が盛んで、岡山の河口から最上流の落合・勝山までおよそ16里(64km)を、往復で1週間ほどかけて運んでいたという。

上りの舟は、塩・砂糖・塩干物などの生活必需品とともに、京・大坂の文化を運んできた。また、岡山への下り舟には、鉄や木炭などが積まれた。旭川と高瀬舟は瀬戸内と内陸を結ぶ交通の大動脈でもあり、出雲大社や金

毘羅山に参詣する人々の行き帰りに利用された。勝山は、その終着地として栄えた町だったのである。

ちなみに、その礎を築いたのは、勝山城主三浦明次で、彼は、城下町の整備とともに、高瀬舟の舟運に特に力を入れ、勝山の繁栄を支えた。旭川を上下する高瀬舟は、鉄道が開通する昭和の初めまで活躍したという。

加納さんに、「町裏の蔵屋敷の石組みをぜひ見てほしい」とすすめられ、旭川の川原へ下りてみた。町並み保存地区は、旭川と平行するように続いている。勝山は「後姿の美しい町」と称されるように、川側から眺める町並みがまたすばらしいのだ。

かつて、高瀬舟の乗り降りや荷物の積み下ろしに利用した、ガンギと呼ばれる石段を下りると、川岸に石畳がほぼ完全な形で残っていた。加納さんおすすめの蔵屋敷の石垣は、大小さまざまな形の石が巧みに組まれた見事なものであった。国道313号線から勝山の町へ入る途中、旭川の対岸からこの風景を目にした時、旅情あふれる佇まいに思わず足を止めた。間近に見る光景も迫力があっていいものだった。

「たたら道」として開かれた

出雲街道

出雲街道の歴史をひもとくと、なんと古代にまでさかのぼる。出雲地方は、木炭用材を切り出す山々と、砂鉄が豊富に採れるという最高の立地条件にあり、全国有数の鉄の生産地だった。鉄は当然のことながら都へと運ばれる。そのため、このルートは、「たたら(鉄)の道」として開かれた交通の要衝にな



文化元年(1804)創業の蔵元、辻本店。鏝絵の施された土蔵に、この町のかつての繁栄がしのばれる



▲街道沿いのせせらぎには鯉が放たれている
▼毎年4月の「がいせん桜祭り」の頃



美甘宿と新庄宿とは、一里半の距離にあったため、休憩所として利用された

った。

江戸時代になると、出雲・美作の諸大名が参勤交代で行き来し、街道はますます賑わいをみせた。政治的、経済的、そして文化的にも非常に重要な幹線道になったのである。当時は街道は、出雲から伯耆に入り、米子から南下し、今の新庄村の旧四十曲峠から真庭工リアに入り、平野部を東に英田郡、佐用町を経て、姫路で山陽道に合流していた。

時代が前後するが、この出雲街道は、元弘の変(1331)で鎌倉幕府との戦いに敗れた後醍醐天皇が隠岐に流される際、通った道ともいわれる。

勝山から新庄川を4〜5キロ遡った神代という土地に、後醍醐天皇の伝説にちなんだ「四季桜」があると教えられ、寄ってみることにした。伝説では、隠岐へ流される後醍醐天皇の輿が、付近の茶屋に休憩した時、供の者が満開の桜の木

に馬をつないだ。その馬が暴れたため、桜の花が散ってしまい、茶屋の老婆がひどく悲しんだ。それを見ていた天皇は次のような歌を詠んだという。

春も咲け、夏、秋も咲け冬も咲け、

四季の桜と名を授け置く

桜は、紅葉まつさかりの季節にもかかわらず、花を咲かせていた。

新庄川に沿って国道181号線をさらに遡り、美甘村に向かった。美甘村(人口1803人)の中心部には、宿場町として栄えた町並みが一筋6・4mの当時の道幅そのままに残っている。だが、古い建築物を保護しきれていないのが現状だ。そこで村では、出雲街道を理解してもらうことを目的に、毎年4月の第3日曜日に「出雲街道歩こう会」を開催。国道の山側に残るおよそ3キロの旧街道を含め、約10キロのみちのりを歩いている。参加者たちの間では、江戸時代の旅人になったような気分が味わえると好評だそうだ。

桜並木と人情の町、新庄宿

美甘宿からさらに北へ6キロほど行くと、新庄村(人口1143人)新庄宿にいたる。その先は、美作国と伯耆国との境にある四十曲峠だ。



この峠は「東の箱根、西の四十曲」とたとえられたほどの難所。新庄の宿場は、峠の麓にあり、休憩するには格好の場所だったという。町並みはわずか400mほどの小ぢんまりとしたものだが、独特の風情があった。通りに面して、茶色い石州瓦の屋根に、板塀、格子戸の家々が建ち並び、まるで時代劇のセットの中に迷い込んだよう。江戸時代には、松江城主の参勤交代の一行が休憩したところで、本陣や脇本陣もある。最盛期には庶民の旅籠が40数軒も建ち並んでいたとか。

往時の佇まいのままの町並みもさることながら、新庄宿は、街道の両側に植えられた137本の桜が見事だった。

「日露戦争を記念して植えられたもので、がいせん桜」と呼ばれています。全国に宿場町はたくさんありますが、桜並木のある宿場はここだけでしょう」

と胸を張るのは、町づくりの会会長の畔高義正さん。桜並木は、宿場の両脇を流れる清らかなせせらぎとともに新庄宿のシンボルとなっており、平成元年第1回の「おかやま景観賞」を受賞した。

畔高さんに、町づくりの方針を尋ねたら、「あじわい」「きれい」「ぬくもり」を3本柱にしています。つまり、歴史や文化を大切にしたいあじわいのある町にすること。また、町並みを美しく保ち、この町を訪ねてくれた人を温かくもてなそうということです」

という答え。どうりで、この町はチリ一つ落ちていないし、出会った人がみな親切だったわけだ。側溝のせせらぎで白菜を洗っていたおばあさんから、「遠いところから、よう来なさったなあ」と声をかけられたことも印象深い。新庄は、桜並木と人情の町。「人の大切さに触れた出雲街道の旅だった。」

文/小田礼子 カメラ/小林恵

- ・勝山町役場まちづくり振興課：0867-44-2611
- ・美甘村役場産業観光課：0867-56-2611
- ・新庄村役場産業建設課：0867-56-2626

新庄宿町づくりの会会長の畔高義正さん





▶シジミ漁が盛んな十三湖は強風が吹き荒れてい。安藤家の滅亡は大津波が一因といわれてきたが...

幻の中世都市が蘇る 十三湊と安藤一族盛衰の謎

青森県市浦村
しゅうらむら

鎌倉時代から室町時代にかけて貿易港として栄華を極めたという十三湊。そこには広く海外とも貿易をして全国屈指の港町を築いた安藤(東)氏がいた。しかし中世十三湊がどのような街であったのか、豪族・安藤家がなぜ滅亡したのかについては謎が多い。1340年に大津波がきて街は壊滅したと語り継がれて来たが、果たして真相は...?

訪ねた日は天候不順で強風が吹き、湖には高波も押し寄せていたが、岸に近い場所では漁者たちが船を出して漁をしている。日本海の荒波をもろに受ける湖と湾岸、ここで昔何が起きたのかと想像しながら、若者たちの果敢な姿を見学した。

十三湖に浮かぶ中の島には全長250mの橋を渡って行く。キャンプ場やケビンハウスがあり青少年の合宿に人気があるが、その一角に歴史民俗資料館がある。

同館には、中世に東北屈指の港と都市があったという十三湊と安藤一族に関する史料を発掘調査の結果や村内にある多数の史跡等と照合しながら展示している。

その解明のために平成4年から国立歴史民俗博物館や大学の考古学研究室による遺跡発掘調査が本格的にスタートし、現在も続けられている。幻の中世都市は実存していた。そしていま蘇ろうとしている！

自然豊かな恵みの湖・十三湖

市浦村(人口2911)はもとより津軽を象徴する十三湖は、海水と淡水が混合した汽水湖で、津軽の文化と歴史を育んで来た岩木山に源を持つ岩木川が最後にたどり着く湖である。母なる川の恵みを受けた十三湖は、幻の鳥といわれるオオセツカや天然記念物のオオ

ワシが生息する。釣りのメッカで、一般にも美味高級なヤマトシジミの採れる豊かな湖として知られている。

史料によれば、十三湊の繁栄ぶりについて、鎌倉時代の「廻船式目」に、三津七湊の一つに数えられ北国第一の湊として繁栄したと記述されている。

平成4年から3年かけて国立歴史民俗博物館と富山大学考古学研究室の調査が行われ、その結果、中世の港町としては始めての本格的な土塁と当時のメイン道路や町家、館、寺院などが確認された。土塁の南側には板塀に囲まれた短冊形の区画が整備され、敷地の奥には井戸や水路も作られていた。刀や鉄製品

中世には東北屈指の活気ある街や城があった

また北側には内堀を囲んで一辺110mの館跡が発掘され、身分の高い武士等の屋敷らしく、近くには職人の作業場があり、火事で焼けた屋根材や柱も発掘している。しかし長い間、十三湊は大津波で滅んだと考えられて

炭化米などの発掘で、京都の町家に似た街と庶民の暮らしが伺えるという。



▲十三湊には中世紀、巨大な街並があった。それを語る土塁跡
▼現在の街並み。しじみを売る店が人気

▶中世頃の十三湊

唐川城址から十三湖や丘陵地帯を望む
住民が草取り、清掃に参加していた



来たが、遺構には津波に襲われた跡はなく、火災（戦火）の跡が見つかった。十三湖と日本海の間にある七里長浜という地区に密度の高い街があり安藤氏の屋敷や家臣たちの家々が立ち並んでいたのだ。何らかの想像を絶する災害で滅亡したのだろう。終戦直後に空撮された写真には中世の町家の区割りが見え、煙の区割りに残っている。

村の内陸部にも城跡や歴史のある神社・寺院が数多くある。市浦の文化財保護に当たる教育委員会を突然訪ねて、古川徹次長に多忙ななかを案内していただいた。「歴史民俗学や考古学を研究調査する専門家や教授・学生、作家などが市浦へよく来てくれます。そういう人たちと話して学ぶことが多く、私達の大きな財産の一つになっています」と言って車を運転してくれた。

まず訪ねたのが唐川城跡。標高120mの丘陵にあり、四方が断崖と谷になっている天然の地形を利用した中世の山城跡で公園になっている。この高台の見晴台から眺める丘陵地と湖の風景は素晴らしい、古代ロマンへの思いをかき立ててくれる。城址公園には植栽もしっかり施されていて、その日は住民が参加して草取りや清掃が行われていた。

一方考古学者が注目しているのが十三湖近くにある福島城址。昭和30年に東大江上教授の発掘調査で住居跡、外堀、門址等が発掘され、古代から中世の遺跡であると推定され、また平成4年の国立歴史民俗博物館の調査では堅牢な土塁と大規模な堀に囲まれた本格的な城があったことが判明した。現在、発掘跡を一部公開している。

続いて、牛のどかに放牧されている緑溢れる台地をみながら、山王坊日吉神社へ。全国的にも珍しい最上部に笠木のある二重鳥居になっており、柱の前後に控柱を設置して神仏混濁の神社になっている。発掘調査で中世の貴重な礎石などが多数確認され、東北最大規模の宗教遺跡だったことが分かった。ここでも炭化物や炭化材が出土しており、建物が火災で焼失したと推定される。鳥居をくぐって静寂な境内に立つと、不思議なほど安らぎ、時が止ったような気持ちになった。

他にも数々の史跡があり、湖畔近くでは火災跡を調べるための発掘も行われている。

日本海を街道にして京や海外と交易した幻の都市、十三湊。もし安藤一族と十三湊が滅亡することがなかったら、東北の歴史は塗り替えられ、北の都として現在も大賑わいしていたことだろう。

謎解きの楽しさを味わいながら、十三湊後にした。

文/館 英和 カメラ/小林恵



▲歴史民俗資料館内部
◀山王坊日吉神社
二重鳥居と沢山並ぶ鳥居が入っていくと古式豊かな神社と貴重な礎石の石組みがある

・市浦村教育委員会
☎0173-62-3761



▶下田漁港の朝市



下田漁港の朝市で始まる天草への旅

夜明け前 闇の中に、そこだけ照明が灯され人だかりがしている。熊本県天草郡天草町(人口4817人)下田漁協前の岸壁、朝市である。防寒着に身を包んだ客が手慣れた様子で、

歴史とロマンが息吹く道

キリシタン文化を脈々と受け継ぐ 天草街道 (天草下島) 熊本県天草町・河浦町

生け簀に泳ぐブリ、イサキ、アオリイカ、アジ、サバ、タイなどを、指差しながら選んでいる。アジがキロ300円。カンパチ一匹500円。キンメダイはキロ500円。隣の本渡市から毎週来るといふ男性。 「やっぱ安いですもんね、新しくて。友だちにお土産にやります」

天草丸の船長豊田安夫さん(68)が、客の選ぶそばからタモ網で掬い取り、魚の急所をしめて、無造作にビニール袋に入れた。

下田漁協前の朝市は、毎週日曜日の早朝5時開始。定置網を営む大宝丸と天草丸が、家族総出で小売りをしているのである。

「市場が日曜日には休みで、定置網に入れたままでは魚が痛みますから。魚屋の半値ちゆうて良かですよ」

ロコミで広がった売り手と買い手の信頼関係が見える朝市だ。午前6時過ぎ、漁協の後に迫る山の稜線がうつすらと見え始めた。朝市の客は、ひと区切りついたようだ。

「天草街道」と名付けた熊本県天草下島の西海岸を辿る旅の始まりである。

暮らしているにも信仰、キリシタンの村

437年前、永禄9年(1566)にポルトガル人宣教師ルイス・デ・アルメイダが、天草下島の志岐で布教活動を開始している。宣教師ザビエルが、鹿児島に上陸してから17年後のことだ。それ以後、キリシタン文化は、迫害と殉教、潜伏の時期を経て、東シナ海に面する天草に根付き、伝えられてきた。

日の出前の下田漁港を後に、一気に大江天主堂を目指した。道路整備が進んでいる国道から大江の集落に入ると、車のすれ違いも困難な急な上り坂の旧道になる。白く美しいロマネスク建築の大江天主堂は、見晴らしの良い高台に建っていた。

大江は、天草の乱で全滅と思われていたキリシタンが、160年余りの歳月を経て、多数確認された隠れキリシタンの村である。

大江天主堂は、天草の伝導に生涯を捧げたガルニエ神父が私財を投じて建設し、1933年(昭和8)に竣工している。天を仰ぐと、中空に残る臥待月が、白い十字架にちょうど重なって見えた。

信徒は、およそ3000人、ガルニエ神父のミサ使えを務めた堀口静夫さん(73)に、話を聞いた。

「小学の4年生から5年生の時でした。伝導婦と一緒に泊っているのですが、朝6時前、部屋の前を神父様を通られる時、咳払いをされると、『そら神父様は行ったよ』と、起こされて。ミサの区切りに鐘を鳴らしたり、ぶどう酒を渡したりしていました」

堀口さんは、その当時に覚えたラテン語の祈りを今も忘れていない。「カタカナで書いてあったのを、丸暗記しよったんですよ。兄から叩き込まれてですね。身に染みているもんで。インノミネ パーテレス エッツファデー スピ



◀天草ロザリオ館





上 / 崎津天主堂
中 / 天草中央漁協副組合長山下さん
下 / 「明日の富津を考える会」の小林さん



経消しの壺

リッツサンクス アーメン」

大江天主堂の前を大きくカーブを描いて下るとすぐ、天草口ザリオ館がある。天草キリシタンの資料館だ。開館は1988年（昭和63）、年間約3000人の入館者がある。

館内右手の小さな部屋は、200年前から伝えられた隠れキリシタンの祈りの部屋を再現してある。かつてはここ大江でも唱えられたオラシヨ（呪文）が静かに流れる。ガラスケースに収めた「経消しの壺」。キリシタン禁教の時代、隠れキリシタンたちは葬式を仏式で行わねばならず、一旦は唱えたお経を消すための儀式に、オラシヨを唱え、この壺に入れた聖水を使った。

誠実を絵に書いたような副館長の山下大恵さん（73）が、誇らし気に説明してくれる。「この祈りの部屋は、私の家にあるものを再現しているのです。経消しの壺も我が家にあったものなんです」

天草下島の西海岸にはもう一つ、海辺の家々に囲まれたゴシック様式の崎津天主堂がある。ここはすでに天草郡河浦町（人口6692人）だ。細い路地の先に、天主堂の十字架が見えた。

天草中央漁協の副組合長山下富士男さん



（73）は、ここの教会委員を務める。信者家庭は約90戸。

「私たちの時は、未信者とは結婚でけんかったです。私の祖母は大江から。隠れキリシタンの子孫ですたいね」

自宅でお聞きしている時、漁から帰った漁師仲間が、採れたばかりの大タコを持って訪ねてきた。お裾分けである。

富士男さんの船「漁吉丸」には、マリア像が祀ってある。船窓には十字架。「漁吉丸」に乗せてもらい、港を出た。

崎津の海の出入り口となる岬に、白い大きなマリア像が建っている。富士男さんが30歳の時、信者に呼び掛けて建てたものだ。漁師たちは今でも、「漁に行きます。日常の糧を与えてください」と十字を切って祈り、毎日出漁している。暮しと信仰が一体となったキリシタン文化は、1569年にアルメイダ宣教師によって、現在の崎津天主堂の前身である崎津教会が建てられてから、脈々と現代に受け継がれてきた。

この日の宿は、河浦町営「海上コテージ」にとった。崎津の港から船で送迎である。羊角湾に浮かぶ小島に寄り添うコテージは、ウッドデッキの上に5棟。遙か南洋の孤島に旅

している気分になる。夜明け前、洋上に突き出したデッキに出て、空を見上げると満天の星。やがて深い藍色の空に、鳥影がほんのり見え始めた。隣室の客一人は、すでにデッキから釣り糸を垂れている。

天草地域の活性化をめざして

天草下島の西海岸、天草町と河浦町を南下してキリシタン文化の名残を訪ねた。さて次は、北上しながら「天草街道」の今を歩くことにしよう。

最初に訪ねたのは「EAT730」と看板を出している食事処。店主の小林欣治さん

（49）は、「明日の富津を考える会」の会長である。現在の会員は30名弱。

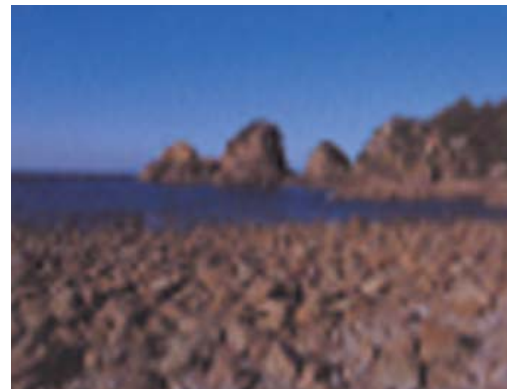
「ホテルの里コンサートやミニバレーボール大会、教会の見える崎津フェスティバルや旧道を中心に缶やビンの除去作業など、年間を通じてイベントをすることで、地域に変化を与える。それが、地域に活力を生み出すと思うんです」

ミニバレーボール大会には、天草中からおよそ700人が集まって来る。地域の人々も変わってきた。合成洗剤を使わない。ゴミを道路に捨てない。しかし、小林会長はちょっと元気がないのである。どんな地域になったら良いのか、展望が見えないというのだ。イベントを企画して、参加を呼び掛ける。町行政や公民館に協力を頼みながら、それをくり返してきて、今曲り角に来ている。「地域の活性化なんて、生まれては消える。」



◀河浦町営「海上コテージ」

▶上 / 妙見浦
下 / 魚を干す崎津の海岸
▼高浜焼寿芳窯(上)と
美味なアンコウ鍋



それで、いいのではないですかね」

小林会長は、自らに言い聞かすように呟いた。

有田焼、高浜焼のふるさと

次に訪ねたのは、町境を越えて天草町役場のある高浜から東へ入り込んだ陶石の山。高浜の庄屋、上田邸の先祖が貧しい村びとを食へさせるために事業化した江戸期からの地場産業。鉄分が少ないほど良い陶石とされる。露天掘りのコンボを運転する大脇和年さん(51)が、表土を取り除くと真っ白の陶石の層が姿を現わした。

「焼物の材料になるかならないかの基準となる火度は1300度。一生掘っても掘り切らんこつ石はあつとです」

露天掘りの現場から見える山々は全て陶石の山だ。埋蔵量は、昭和20年代の調査で推定

5億トンと言われている。年間に掘り出す量が5万トンから7万トン。無尽蔵といってもよい。しかし、30年間選鉱の仕事をしてきた田中高光さん(50)は、「以前は特等や1等も多かったが、最近では4等から2等ばかり」、陶石の質が落ちたと心配顔だ。

天草陶石のほとんどは、有田焼の材料として佐賀に送られているが、地元にも5軒の窯元がある。高浜の庄屋上田家の先祖から受け継いだ地場産業は、しっかりと地元根付いた。1815年に建築された上田邸の隣で窯を開いている「高浜焼寿芳窯」では、観光客に絵付けもさせてもらえる。



▲天草陶石を露天掘る現場

「天草街道」を歩いて、最も元気の良かったのが「子守唄万十」で有名になった福連木地区の「かしの木館天草町角山グループ」である。

天草地方農漁村活性化グループ連絡協議会が、雨降り対策事業として県道沿いに「かしの木館」を建てた。学校の先生だった尾上秀代さん(75)を代表に、農家の主婦8人が集まってソーダ万十と黒砂糖万十を作り始めた。平成3年のことだ。

しかし、テーブルの上は、「膨れもせて」、売れない万十が山に。「そんな万十は、会員で買ってくださいよ、牛に食わせよった。旦那は、銭にもならんと何しげ行くか、と」



▲福連木・子守の里の看板
◀蒸し上がった「子守歌万十」をパックにつめる「かしの木館」のお母さんたち



最初のうちは月給が2〜3000円。研修では、「いっちょよずつ覚えてこんばつまらんと」と、皮の調合の仕方、蒸す時間など一つ一つに改良を重ねた。

その結果、平成6年頃から売り上げが急上昇。売り上げから材料費を引いて、残りを全員均等の時間給で割って分配する。月給が男顔負けの「公務員くらい」ということもあった。「そのかわり昼ご飯は、3時4時」

壊れやすいガラス細工を扱うように万十の皮を広げて餡を包む。手のひらで空気をこねるように丸めていく。クワツカラ(サルトリイバラ)の葉を敷いて、蒸し器に入れるとひと段落だ。その手付きの柔らかさに、万十つくり12年の歳月を感じさせた。

およそ40年前まで、主な交通手段が海路だった天草の暮らしは、入江の町を中心とした点の文化だった。近年になり、海岸沿いを貫いて走る国道が整備され、入江の町を繋ぐ線の発展を予感させる。2005年1月に、天草2市13町が合併し3つの市になる時、点として育んだキリシタン文化の独自性を尊重しつつ、どんな地域作りが可能なのか。熊本県天草では今、模索が始まっている。

文・カメラノ芥川仁

・天草町役場 ☎0969-42-1111
・河浦町役場 ☎0969-76-1111

日本の原風景に
出会う街道

古街道に連なる六つの宿場町 山中七ヶ宿街道

宮城県七ヶ宿町
ひらがしゆくまち



出羽・津軽十三大名の参勤交代で賑わった山中七ヶ宿街道には、かつて7つの宿場があった。豪雪、冷害、凶作の続く厳しい土地柄で、一里毎に連なる宿場の賑わいは、村人たちの暮らしを活気づかせ潤わせた。奥羽山脈を跨ぐ山中のその街道にいま、当時の面影は僅かに残るのみとなったが、歴史の凝縮された七ヶ宿街道への想いは、沿道に暮らす人々の胸に今も誇らかに生きている。



▲七ヶ宿・下戸沢宿



▶山形さん夫妻

駄賃稼ぎ、旅籠屋、木賃宿、煮売屋

山中七ヶ宿街道は藩政時代、奥州街道と羽州街道を結ぶ脇街道として栄えた。宮城県白石市から山形県の湯原まで、街道沿いには上戸沢、下戸沢、渡瀬、関、滑津、峠田、湯原と七つの宿場が並び、出羽・津軽十三大名の参勤交代や出羽三山詣での旅人で賑わった。

宿場には旅籠屋、木賃宿その他、茶屋や煮売屋が軒を連ね、次の宿場まで荷運びをする人夫や馬が盛んに駄賃を稼いだという。宿場のひとつ滑津には、いまなお大名の泊まった本陣がその姿を残し、代々の家系を守り継いでいる。

街道の途中には奥羽山脈を越える険しい難所もあったが、日本海側と太平洋側を結ぶ重要な交通のルートとして、人々の往来に物資の輸送に街道は大きな役割を果たしてきた。今ではその峠越えもトンネルの開通で容易になり、仙台方面に向かう関西以西のトラックが、東名や首都高の渋滞を避けて、北陸道から新潟を経てこの街道を抜けていくという。

直角に曲がった町並み

東北道から七ヶ宿街道を目指して宮城、福島、福島の県境小坂峠を越えた。七ヶ宿町(人口1990人)は初冬の曇り空。峠には風花のような白いものが舞っていた。半分程の木々がもうすでに葉を落とし、山道はかさこそと音をたてている。

上戸沢は七ヶ宿街道最初の宿場。藩境の警



上ノ資料館には街道の様子が縮尺模型で再現されている。下ノ安藤家本陣。幕末には大名も宿泊したという。

護という役割もあり、重要な番所が置かれた宿だった。大きな家の並ぶのんびりとした集落に人影はない。何軒かの家を訪ねてみた。ガラス戸を開けると、こたつに座ったおばあちゃんが電話で長話をしていて、一人暮らしなのだという。老夫婦が暮らすもう一軒の家でお茶をご馳走になった。村の消防団からの表彰状が鴨居にいくつも並ぶ。

「わたしがお嫁にきた頃にはまだご番所があったね」と山形チミノさん(75)。「この通りを殿様が通ったんだからねえ」とご主人の清治さん(77)も感慨深げに昔を振り返る。

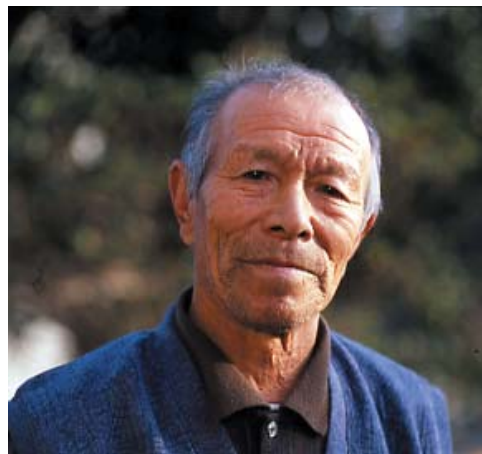
上戸沢に続く下戸沢宿にはかつて本陣が備えられていた。当時の建物は既になが、要人の防備を兼ねた宿場にふさわしく、町並みが中央で二回直角に折れ曲がっていた。

「今のたばこ屋が本陣の跡だけど、殿様は本陣に泊まったと見せかけて、実は隣の家に泊まらせたんですよ」と通りがかった男性が教えてくれる。「かどや」という屋号のその家が通りより一段高く建っているのはそのためだ。

旅人が休憩し、わらじを履き替えた「親子松」の付近。巨大なわらじが鳥居に飾られている



炭焼き名人石太郎さん



炭焼き名人の佐藤石太郎さんと、白炭を作る炭焼き小屋

下戸沢に続く3番目の宿場渡瀬は、七ヶ宿ダムの建設により湖底に沈んだ。街道の面影を最も色濃く残すといわれた渡瀬の3つの集落や、伊達政宗が川獺を楽しんだという渡瀬川も今はダムの底だ。

ダム建設のため生まれ育った渡瀬を離れ、宮城県白石市に移り住んだ佐藤石太郎さん(82)を訪ねた。佐藤さんは近在では炭焼き名人の石太郎さんと呼ばれて知られた人。兵隊にとられた6年間を除けば、15歳から人生の殆どを炭焼きとして生きてきた。石太郎さんが焼くのは一般的な黒炭ではなく、ガスの出ない白炭一筋だ。60年に及ぶ経験に裏打ちされた石太郎さんの白炭は、品質面でも常に高い評価を受けてきた。白炭は室内で使っても中毒にならず、火鉢や掘りこたつ、養蚕などに適しているという。

集落の殆どが炭を焼いていた時代、石太郎さんもひたすら精を出し福島の養蚕農家に炭を売った。

渡瀬の宿場が賑わいをみせたのは、東北本線や奥羽本線が開通する明治の頃までで、その後の村は山林資源に活路を求め、炭焼きに従事する人が増えていったという。チェーン

ソーもなく、原木を伐るのも手斧だったという炭焼きの仕事は、焼いた炭を山から運ぶのも大変な作業だった。

「朝暗いうちから提灯つけて山いって、二、三俵の炭を背負って一時間半位歩いてな、朝飯食ってまた行って。それでも苦勞と思わなかったなあ。」

と石太郎さん。炭二俵を運んで納めれば一日分の日当になった時代、石太郎さんは三日分を稼ぐ働き者だった。ダム建設に伴う補償交渉の際には、夜になると家の裏に行っても川も「すべてカネで計算しなければならなかった」それが何より辛かったと話す。

一夜に200人を泊めた本陣

ダムを過ぎると間もなく、七ヶ宿街道最大といわれた宿場関宿が現われた。参勤交代の際には一夜に200人を泊めたという関本陣のあった宿場町だ。今も七ヶ宿宿町役場や森林組合、商工会事務所などが集まり、町の中心地となっている。

本陣跡には江戸時代を通して本陣を勤めた渡辺家の子孫が、関本陣旅館を営んでいた。この関本陣に残された古文書に、幕府役人が逗留した際の食事メニューが記されていて興味深い。朝食はご飯、八マグリ汁、たこの煮びたしに、かわいい、人参、豆腐などの葛かけ。昼はさけの塩焼き、味噌漬けに、あわび、山芋、栗などの葛かけ。

参勤交代で江戸へ向かう殿様と土地の娘の悲恋を語る振袖地蔵



夕食には鴨、せり、こま豆腐などの汁ものと、すすきの焼き物、しの竹、卵、ほうれん草の煮物と、山深い宿場町のもてなしとしては実に豪華な食材と料理が並んだ。

8年掛かりの、屋根のふきかえ

この関宿の隣、滑津には代々本陣を勤めてきた桜井家に変わり、文政12年(1829)より本陣を勤めてきた安藤家の屋敷が、風格のある旧観をとどめたまま現存している。切妻破風の玄関、重厚な萱葺きの屋根の佇まいは、七ヶ宿街道の栄華を伝える貴重な建物と言えるだろう。

屋敷内には安藤家の末裔が現在も生活している。そのため内部は非公開とし、テレビや新聞、雑誌などの取材にも応じないことを原則としてきた。ところが役場の担当者の熱心な交渉のお陰で、撮影は無しという条件で少しだけお話を伺うことができた。

飴色に磨き込まれた柱や梁、高い天井。彫刻の施された見事な欄間。2畳ほどのこの居間の向こうに、殿様が休んだ「上段の間」と

▶名古屋から移り住んで炭を焼く佐藤光夫・円さん夫妻
▼グループ「八吾作」のメンバー。今野三喜男さん・恒彦さん親子と小山真光さん、森勇一さん



呼ばれる部屋がある。かつては七つの蔵が並んでいたという中庭では、罪人の打ち首も行なわれたという。トイレ脇の棧はその時の供養のため植えられたものだとか。

築後300年近く経つという建物は、さすがに傷みや使い勝手の悪さが目立ち、隙間風を防いだり、建具の狂いにはつつかえ棒をしたりと、外部からは分からない苦心のあとが随所にみられる。特に萱葺き屋根のふきかえには大変な費用と時間を要するようだ。白川郷から職人呼び、「さし萱」という技術で古くなった萱をとり除き、新しいものをさしていく。萱はすぐろという春に刈った萱だけを使うため、一般的に使われる葉萱の倍も値がはり、経済的にも大きな負担になるのだという。今年も玄関、来年は北側と少



しずつ手を加え、全部の屋根を終えるのに八年もの年月がかかるという大仕事だ。

「できれば空き地に文化住宅でも建てて暮らしたいというのが、ホンネです」

と咳くご当主に、同情したいような気分も。文化財にも匹敵するお屋敷を、暮らしながら維持していくということのご苦労は、並大抵のものではないようだ。

水源の森に炭を返そう

滑津宿に続く峠田は昭和13年の大火で宿場の殆どが全焼した。七ヶ宿街道の滑津以西は「一里一尺」といわれ、一里進めば一尺ずつ雪が深くなっていくという豪雪地帯だった。雪の多さは今も変わらない。

その街道から南へ少し入った山の中で、炭を焼いている一家がいると聞き訪ねてみた。冬には一面雪に覆われる雑木林の斜面に、炭焼きの窯と、そのすこし奥に林に溶け込んだ感じのいい住まいが建っている。住人は佐藤光夫さん(38)とその家族だ。名古屋出身の佐藤さんは七ヶ宿に移住して9年目。それまで勤めていた出版社の仕事辞め、自給自足をめざして仙台に移り住んだ。農業を始めたものの、彼の関心は山へと向かっていった。

「畑の仕事をしているうち、畑にくる水が山から流れていることに気付いたんですね。山は大地を潤す水の源だということを、改めて考えました」

と佐藤さん。そんな佐藤さんが炭を焼き始めたのは、あの炭焼き名人佐藤石太郎さんとの出会いがきっかけだった。山仕事を通じて知合った石太郎さんの炭焼きの技術と人柄に惚れ込み、この七ヶ宿に窯を築いた。今は石太郎さんの一番弟子として、白炭のブランド化に取り組み、主にインターネットなどを使って販売している。

佐藤さんはその炭を山に返して、土壌にミネラル分を増やし、山の水をおいしくしようという活動。水守人ミレーティングイン七ヶ宿の主要メンバーでもある。これは水源の町として水質日本一を目指す七ヶ宿町が今、町をあげて取り組んでいる試みだ。

娘たちの喜びを運んだ道

街道沿いを歩くと、役場の周辺や商店、民家の軒先に、昔風の屋号でかかれた看板をいくつも見かける。役場は「町方役所」に、銀行は「両替所」に、浄化センターは「活水場」にと筆文字で揮毫された案内看板や、表札代わりに屋号でかかれた民家の看板も目立つ。苗字のなかつた江戸時代、互いを屋号で呼びあつた習慣が、この地には今も残っている。

これらは地域おこしグループ「七ヶ宿町屋号再現社・八吾作」のメンバーの手によるもので、七ヶ宿町の町並み景観条例にもとづいて、彼らが考案・作製したものだ。これからさらに街道沿いや町中にも増やしていきたいと、メンバーたちは張り切っている。八吾作のメンバーは林業家、商店主、銀行マンなどとさまざま。藩政時代に賑わった宿場町の景観を現在に甦らせようと、意欲的だ。

杉林の山並みが遠くに続く街道沿いの畑で、立ち話をしていた70代の森千津さんと井上ミサコさんが、懐かしそうに七ヶ宿街道の昔を語ってくれた。

「娘の頃、炭俵二俵を背負ってね、この関の宿場から滑津、峠田、湯原そして二井宿峠を越えて高島町まで、炭を売りに行きましたよ。それでね、雪下駄が一足買ったの。それが、嬉しくてね」と井上さん。

宿場町と参勤交代で知られた山あいの街道は、娘たちのこんな喜びを運んだ道でもあつた。

日本の原風景に
出会う街道



文人往来、江戸幕府の天領

妻入りの街並北国街道出雲崎宿

(新潟県出雲崎町)

▶芭蕉園/元禄2年(1689年)7月、芭蕉は奥の細道の旅の杖をここにとどめ「荒海や佐渡によこたふ天河」の名吟を残した。昭和29年7月(1954年)芭蕉真筆の銀河の序を刻んで句碑にし、その回りを庭園とし芭蕉園と名付けた。この芭蕉園は廻船問屋敷賀屋の跡地である。またすぐ前に芭蕉が一泊したと伝えられている「大崎屋跡」がある。



海岸への路地



岩船町・廻船問屋泊屋



出雲崎町(人口5846人)は、江戸時代には徳川幕府の直轄地(天領)となり、佐渡金銀の陸揚げ港、北前船の発着港として栄えた。そのため宿場町として北国街道で最も賑わい、妻入りの家が日本一の長さ3・6kmにも連なっており、幕府の代官所、船問屋、旅籠、遊廓などが密集していた。ここには芭蕉が訪れて「荒海や佐渡によこたふ天河」の名句を詠み、他に十返舎十九、吉田松陰、剣雲泉等の文人が多数訪れている。名僧良寛は出雲崎の生まれで、各地の寺で修業したあと越後に戻って書や詩歌を残している。

往時の賑わいを偲ぶことは出来ないが、各所にその足跡があり、それらを町や「妻入りの街並景観推進協議会」が収集整理し、住民の協力で看板や草花の植栽等、家屋の保存等に力を入れている。観光の拠点として「天領の里」がある他、北国街道交流会館等も計画されている。

海と妻入りの街道、緑の丘陵が見事に調和した町

目の前の海には二つの海水浴場と漁港があり、穏やかな入江からは漁船がすべるように出入りしている。海岸近くを西南に通っているのが北国街道で、江戸時代当時としては道幅の広い道がほぼ真直ぐに伸び、その両側にはびっしりと妻入りの家々が立ち並んでいる。家々の裏手には山が迫り、樹齢何百年の木々の間に10の神社と20の寺がある。紺碧の美しい海と、奥行き長い重厚な妻入り屋根が密集した街並、その背景にある緑の丘陵地と寺院。この対比は絶妙で息を飲むほど美しい。「新潟景勝百選」の一位

に選ばれていることも納得できる。現在は、街道の裏手・海岸沿いにバイパスが出来たため、その昔軒下まで海が迫り、漁師達が家の裏口から船を出したことは、わずかに残っている古い建物から推測するしかないが、その分、街道の道は生活道路としてのんびり歩くことができる。

出雲崎宿の特徴は、「うなぎの寝床」的な妻入りの建物で、越後で一番人口密度が高かったため間口は狭いが奥に長くした、また当時は間口によって税金がかけられたためその対策でもあったといわれている。奥行きが70mにも達している家もあり、これは普通だと3、4軒分になる。

もう一つの特徴が、「町建」といって、江戸時代に地域を治めた名主や検知制度の施行により、3・6kmの中に尼瀬から井鼻まで11の町があり、町建した時期が異なっていること。本町と呼ばれる古い町は慶長年間に形成されたが、天保15年(1844)には本町を脅かす程の町や村が軒を並べるようになっていた。出雲崎へ行けば食べていけると近在から人々が集まって来たのだろう。金銀が荷揚げされた日の賑わいが見えるようだ。

さらに、前述したように神社や寺の多さに、改めて北陸の信仰心の厚い風土に驚くが、街道を歩いてみると、路地ごと山へ登る石段があり、登っていくと寺や神社がある。境内も建物も立派で今でもよく手入れして維持されていることにまた驚かされる。

**出雲崎妻入り街並景観推進協議会
が保存と景観づくり**

実際に街へ入って歩いてみると、江戸・



▶良寛記念館 良寛は橋屋という出雲崎きつての名主の家に生まれながら、生涯を仏教と子供や貧しい人々のために生き、自由人を買った。生涯の地の街並を見下ろす丘の上に良寛記念館がある。和風平屋づくりの清楚な建物で、良寛関連の絵画文献、貴重な遺墨等がある。記念館の上の丘にある「夕日の丘公園」は、にいがた景勝百選1位に選ばれ、子供達と遊ぶ良寛像がある。

明治大正時代の賑わいは消え、密集した妻入り家屋もところどころで壊れて穴が空き、歩いている観光客の姿は、平日で風雨が予想された日だったせいかもしれない。残っている古い家屋でも人の気配がなく、夜になると早めに戸を閉めてしまいう商店が多かった。高齢化が進んでいるのだろう。

そんな中で、街の中心部、良寛の生誕地「良寛堂」の隣にある食堂「まるこ」は夜遅くまで賑わっていた。民宿も経営しており、海辺の見える部屋をお願いした。街道から海まである大きな妻入りの家で、昔は北前船の仕事をしてきたが、乾麺製造に仕事換えし、現在の小林秀輝さんの代になって食堂兼民宿を始めたと言った。

小林さんは出雲崎町観光協会の会長をしている。
「都会へ出て空家になっている家が多く



なりました。数年前に下水道工事をした時、空家を取り壊した家があり余計に目立つようになりました。最近では良寛の史跡を訪ねてくる観光客も多くなりましたが、古い街並の方はパツとしない。良寛、芭蕉と併せて、妻入りの古い街並をゆつたりのんびり歩くのが楽しい町にしていきたいと思います」



▲天領の里/日本海に突き出し佐渡島を一望する場所に天領の地を再現。「時代館」は300年前の金銀の輸送船(御奉行船)、御金蔵、数百頭の馬で江戸へ輸送する御金荷などを実物大の模型や写真、資料で展示している。また巡見使等が来た時の街道の様子を示す街並が再現してある。
また、出雲崎は紙風船、和風の伝統工芸品が昔から造られ、海外でも人気を呼んでいる。これらを実演・体験し展示販売するコーナー、物産コーナー、レストラン等がある。



石油記念館/我が国の機械による石油掘削の1号井跡を近代石油産業発祥の地として記念館を建立、参考品を陳列している。またここは世界初の海底油田掘削地でもある。

翌朝宿へ「出雲崎妻入りの街並景観推進協議会」の世話人、渡邊常侃さんが訪ねて来てくれてガイドしてくれた。同会は平成8年10月に設立され、地区住民、商工会、建築組合、観光協会の代表40名で構成されているAグループ、歴史調査や環境保全を推進して来た専門家達によるBグループ、会社員や定年退職者で構成されるCグループがあり、全国的にも珍しい3・6kmに及ぶ妻入り街道の調査研究と町内外へのアピール、保存と修景を目的にした町の活性化を目ざしている。渡邊さんの家は江戸時代に茶屋を営んでおり11代目とのこと。現在はもっぱら街並景観づくりの仕事に追われているようだ。

「まず自分達の街がいかに素晴らしく歴史的価値のある地域かを住民が自覚することからスタートし、そのために調査や研究、パンフレットの製作・配付に力を入れて来ました。」
 「おもしろ看板」という手作りの看板、住民のボランティアで植木や草花の鉢を作り無料で配付する等して、少しづつ散策が楽しい街になっていきます。良寛記念館や天領の里、史跡などは観光客がよく来てくれますが、街道を魅力あるものにするためには、スポットになる店と人の賑わいが必要で、若い人にもっと参加して欲しいですね」と語る。

平成8年には「歴史街道」として国の選定を受け、県下で始めての県ふるさと新潟顔づくり整備事業が適用され、道路舗装や橋、小公園の設置等の工事が終了している。

街をガイドしてもらって、史跡や歴史的価値のある建造物の多さと渡邊さんの

博学ぶりに驚かされた。スペースの都合でここでは詳しく述べないが、ぜひ訪ねてみたい場所である。

「人にやさしく明るい町になりました。この活動をはじめてから家屋の修理や景観に気を使う家が多くなり、在京の人たちも協力的です」

街道の途中に、東京から食通たちがわざわざ食事にやってくる割烹「みよや」がある。明治時代から続く料理店で、街道沿いの建物は大正時代の西洋館を今に伝えるクラシックで優雅な建物。地元漁師による高鮮度地魚を3代目大矢久幸店主が自慢の腕で調理する。故田中角栄氏なども利用したという大正ロマンを漂わせる洋間は今も会食予約が满满であるようだ。2階正面には当時の職人の高度な漆喰細工技術が残されている。一方、奥まった海岸よりの建物は昨年改装、木の香溢れる宿泊もできるお休み処になった。広々とした部屋から海を見ながら、名物の鰯料理を味えたら最高だ。ちなみに宿泊料金は「街のPRと活性化のためにたいたいま1泊2食付きで1万円でOKです」という嬉しい返事が返って来た。

街の一角に、2年前に東京から移住して陶芸工房「いづも」を開設している陶芸家いづもかんさんがいる。100年をゆっくに越える家はモダンに使いやすく手入れされ、朱や土色、海の色をたたえる作品と見事に調和している。「旅行で出雲崎に来て山の上に立った時、こんな素晴らしい街はない、ここに住もうと即決しました。まだ都市の人を積極的に受け入れる体制がなかったため、役場の助役さんのお世話になり、空家になっていた妻入りの家を借りられました。もっと都

市から移住する人が増えると、街が変わってくると思います。裏に漁港があるので新鮮な魚も手に入るし、家は住み心地満点、土も火も出雲崎のものを使ってお気に入り入っています」と言う。

現在弥彦村から出雲崎町まで、木工、陶芸、竹炭など7人の手作り工房があり、これらの工房をめぐる「知る工路道（しるくるいど）」をアピール中だ。

・出雲崎観光協会 ☎0258(78)3111
 文/浅井登美子 カメラ/満田美樹



割烹「みよや」 改修した宿泊施設（左）と大正ロマンの面影を残す洋間



みよや3代目大矢久幸・好子夫妻

▶上/陶芸工房「いづも」にて街を案内してくれた渡邊常侃さん（左）といづもさん
 右&下/100年を越える民家といづもさんの陶芸作品



▶姫路道に沿って流れる錦(かぶら)川、護岸整備されたが清流の豊かさはいまも宿場町の面影を残す本宿

欄干付きの養蚕農家が連なる国境いの道 中山道の脇往還「上州姫街道」

群馬県 下仁田町、南牧村

中山道は江戸・日本橋から京・三條へ、関東・中部・木曾・飛騨を經由して行く69次136里(54.4km)の街道で、和宮など將軍家に嫁ぐ姫宮が通ったことから「姫街道」とも呼ばれている。昨年2002年は、徳川家康が中山道に宿駅制度を制定してから400年に当たり、岐阜県では「姫街道400年祭」の行事が行われた。

一方、上州と信州を結ぶ中山道の脇道には「信州姫街道」と呼ばれる街道があり、庶民や女子供が安心して往来できたことから「姫街道」として親しまれて来た。

この姫街道は、長野県境になる下仁田町や南牧村で今もその面影を残しており、その家はかつて養蚕が盛だった上州にふさわしい佇まい。荒船山の景勝地の麓にある丘陵地は養蚕に代って、ネギ、コンニャク、炭などの産地として頑張っている。

本宿に残る脇街道の賑わい

下仁田町

中山道は、上州・信州堺では軽井沢から坂本へ、碓氷峠を越えていく。その中山道の幹線に対して上州側

の南に聳える怪奇な岩肌を見せる山、妙義山、荒船川の脇を通る街道があった。姫街道と呼ばれる街道で、道は下仁田町の市街地から南北二つに別れる。北は本宿(下仁田町)から荒船山の北側を通って信州佐久へ、南は砥沢(南牧村)から荒船山の南を通って佐久へ至る脇道であった。

荒船山は東西約400m、南北約2kmの巨大な溶岩台地で、平坦な山頂部は荒波を蹴って進む船を思わせることからその名が付いたといわれる。雨乞いの山として信仰され、最高峰縁塚山(標高1422m)には祠があり、弘法大師伝説が残っている。この大空に船を浮かべたような山を見ながら、旅人は信濃と上州の国境を越えて行ったに違いない。

本宿と信州を結ぶ道は「下仁田街道」とも呼ばれ、江戸時代には信州から米等の物資が入ってくる重要な道で、街道沿いには市や商店、穀物問屋が軒を並べていた。

下仁田町(人口1万1293人)へは上越自動車道の開通で、東京からクルマで1時間30分程で着いてしまう便利な場所になったが、道路網の整備で、信州への通過車両が大分増え、また町の若い人は高崎市や富岡市へ通勤するので、この辺りでも昼間はお年寄りとおさな子供の姿しか見られない。

しかし市街地から国道254号、錦川(かぶら)に沿って走って行くと、紅葉した山や街路樹の中に昔ながらの農家が点在する田園風景となり、道路脇に西牧関所跡がある。文禄2年(1593)に設置されたもので、中山道の脇街道であった姫街道を解説する看板等が立

てられている。

ここから右手に入っていくと姫街道の宿場町として賑わった本宿地区へ出て、さらに風景は一変する。現代的な中に昔ながらの木造住宅、手入れされた植木などのある落ち着いた街である。西牧小学校の児童たちが、車椅子に乗って街を歩いてみる体験授業を行っていた。「イェーイ! ここが一番いい街だよ」とカメラに向かってポーズする。

やがて両側に古い木造家屋が立ち並び本宿宿場町が現れた。昔は本宿村として、信州から入ってくる米や大豆等の市が立ち、商店や問屋が軒を並べる街だった。今は朽ちたまま住み手のいない家もあり、隆盛を極めた当時の面影はないが、それがかえって当時を彷彿させる。

この辺りの民家は2階の建てが高い平入りの家が多く、格子を取り付け、中には塗屋造りや土蔵造り家も見られる。以前醸造屋だった家は大きな黒漆喰の土蔵造りだが、今は酒



本宿入口に近い市街地。小学生が車椅子に乗って町を歩く体験学習をしていた

日本の原風景に
出会う街道



本宿先き、清水沢地区の姫街道
丘陵地を利用して3層に家が建つ



造りを辞めているということで、残念ながら昼食を食べる食堂もこの日は休業していた。史料によれば本宿村は天明5年と寛政8年に「穀市立て訴訟」を幕府勅定奉行所に上告している。それは、信州米をめぐって市野菅村と紛争が起き、何とか調整して欲しいと嘆願したもの。

本宿には往古より九歳市が立ち、穀物売買も自由に行われて来たが、同村に真近い市野菅村に新市が立ちはじめ、本宿へ向けての穀物を途中で引き止めて売買されるため、本宿は衰退し村人も難儀している、市を停止して欲しいというもの。それに対して市野菅村も「本宿の諸国一統の独り占め売買は近郷村々が難儀してきた。菅村での売買を求める声が強く、繁昌している。本宿の穀物に支障を与えることはしていない」と受けて立ち、原告・被告が共に出廷して争い、約一年後に両者の妥協案で決着している。その市野菅地区は、国道をそのまま信州方面へ行った集落で、山道を登ると神津牧場に至る。古い街並は残っていない。

本宿の古い街並を過ぎると姫街道は鑓川にそって両側に農家の家並みが続く清水沢地区へと続く。自宅の庭先で作業をする男性がいたので街道について聞いてみた。竹内匡一さん(67)で、下仁田ネギ等を栽培している。「この街道はザク口道ともいうんだよ。狭い土地を利用して家や畑を作るために石を組んで家を建てる。それが種がびっしり入っ

るザク口のように見えるんだね。この辺りは家が3段階に建てられていて、道路の南側の家は河川敷きの低い土地に建てているので、道から見ると一階だが、下へ廻ると二階建て三階建てが多い。わが家もそうです。道路北側は道沿いの家のその奥の小高いところにもう一段家が建っているんです」という。

竹内さんの案内で河原へ出てみると、確かに土地と家が3層になっていて、独自の美しい家並みを形成している。

竹内さんは下仁田名物の下仁田ネギ、コンニャクを栽培していて、橋を渡ったところにある畑へ案内してくれた。

「下仁田ネギは11月末頃から収穫してもいいことになっている。その頃になると白い部分がたつぷりある旨いネギになります。いまだに並んでいるのは収穫が少し早すぎるか違う種類だね。白い部分が少ないのは殿様ネギが深谷ネギですよ」

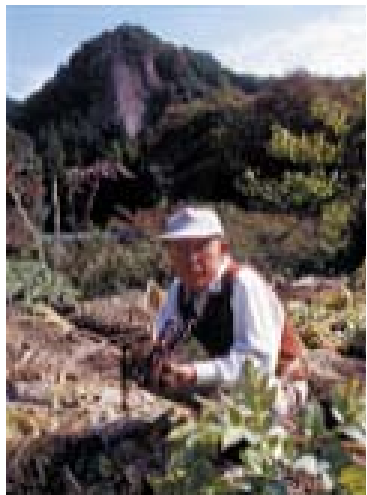
竹内さんは丁寧な作った本場本物の下仁田ネギを年末に親しい人に送ってあげるのが楽しみで栽培していると言う。隣の畑には3年間栽培して来たコンニャク芋が収穫を待っていた。

竹内さんの先の道路の上に一際大きな屋敷があり、奥さんの竹内里子さんが庭掃除をしていた。上り坂の道路脇には江戸時代の道祖神が立ち、さらにその先には下仁田ネギ発祥の地の石碑もある。

里子さんの家は部屋数10室以上ある大きな家で蔵や納屋が家を取り囲んでいる。「家は明治30年頃に建てたものですが、南側に窓を広く取っているので、冬も暖かく風通しがいいので、手入れすれば十分快適に過ごせます。我が家は養蚕をやり、昔は一度に100gは飼っていました。昭和20年代でも春夏秋と各々30gは飼っていて、河川敷きも山麓も一



かつては地域一番の養蚕家であった竹内達雄・里子さん夫妻。明治30年頃建築の家屋敷は手入れもよく快適な住まい



コンニャク畑にて竹内匡一さん芋は3年間育成して収穫する

面桑畑だったんです」と言う。

家は養蚕用に、二階に外廊下の役目を果たす欄干を設けている。元文化財保護委員会会長をし、現在川魚の養殖をしているご主人の達雄さん(76)が養殖所から帰って来た。

「本宿の復興も後継する若い人がいないと無理で、いまは停滞しています。都心からも比較的近くて自然景観もいので観光に力を入れ、農業体験民宿でも始めたらという話はあるんですが、山を越えれば軽井沢なので通過地点になってしまつ。もっと田舎だと地域おこしも熱心なんでしょうが、ここは中途半端ですね」とご主人は言い、「雪も少ないので家は長もちし、農作物や山菜も豊富、住むには最高ですよ」と奥さんがつけ加えた。

「お茶でもどうぞ」という竹内匡一夫妻の軒先で渋茶をいただいたあと、市街地へ戻り、荒船山の南側を通る南牧村の砥沢宿をめざした。

- ・下仁田町商工観光課
☎0274(82)2111
- ・南牧村商工観光課
☎0274(87)3657



◀▶ 砥沢関所跡を示す石碑
南牧川下流の集落



欄干付きの粹な 養蚕農家 南牧村

現在主要地方道下仁田・白田線と呼ばれている道が、南牧村(人口3366人)を走る姫街道。南牧川に沿って街並が続き、川の向こうには大きく立派な二階建ての屋敷が目立つ。街へ入って目についたのが酒造業をしていた家。格調ある玄関やレンガを積み上げた煙突が昔の繁栄を忍ばせるが、無人になっている。

街の中心部は商店もお洒落に模様替えしているので旧街道の面影は少ないが、和菓子店、レストラン、ブティックなどが各々工夫し活気を呈しているのには感心した。

やがて道は山道へ入り、カーブをまわるといきなり南牧川が美しい岩肌と豊かな溪流を見せる自然峡が現れた。砥沢とは、もともと砥石の産出する場所だったことから付けられた地名のようで、武田信玄の頃から採取が行われ、いまでも高級砥石の産地として、二の企業が緑業している。

その少し先に、ここが中山道の脇街道であったことを物語る砥沢関所跡がある。看板と石碑が立っているだけだが、地域の人や木や花を植えて手入れしている。ここからが砥沢宿で、狭い道の両側には古い家が密集している。人通りも少なく通過する車も少ない山中に出現した密度の濃い街並みには驚かされた。

溪谷沿いの狭い土地を利用しているので家

は大きくないが、みな二階建てで、二階には欄干が取り付けてある。一見旅籠かと思うような洒落た造りだが、これは養蚕農家の家なのである。

藤原重太郎さん(85)の家も欄干付きの典型的な農家。

「明治から大正、昭和にかけてここは養蚕が盛んで、二階も使って蚕を飼った。作業するための通路として欄干を設けたんだね。養蚕を辞めてからは、コンニャク芋や椎茸を干しておく場所に使ったりして何かと便利です」と言う。

「昔は200戸あったのに今は100戸を欠けるようになってね、家は息子は勤めているから夜には帰るけれど、孫は下宿してしまつた。年寄りがのんびり暮らすには最高にいいところだけだね」

集落の10キロほど上流には「なんもく村自然公園」があり、最近では都市から訪ねてくる児童生徒が増えて来た。5ヘクタールの緑の中にコテージ8棟、バンガロー17棟、ひのき風呂の管理棟があり、星空観察所もオープンしている。

南牧村は98%が森林で、森林組合が首頭をとって「炭」によるまちおこしを行い、炭入り菓子、炭入り蕎麦、炭入りコンニャク、炭入り枕、湿気取り用品等のユニークな商品が人気を呼ぶようになってきている(でばら19号で取材)。

帰りがけに村の特産品を売る「自然休養村管理センター」へ寄ると、炭入りラーメンも登場していた。前橋から嫁いで来てここで働く茂木美智子さんは「ここは豊かな自然と人情がいっぱいのとてもいいムラですよ」と力説していた。

文/浅井登美子 カメラ/満田美樹



左/炭入り製品を持って、茂木美智子さん、工藤まき子さん
右/欄干付2階屋の自宅前に立つ藤原重太郎さん

砥沢の姫街道沿い集落。2階には欄干が付きかつて養蚕が盛んだった頃を物語っている

日本の原風景に
出会う街道



秋葉街道は、信州・茅野を起点に、杖突峠を越えて高遠へ出て、赤石山脈の山裾を南下して遠山郷・南信濃村へ、そこから青崩峠という最後の険しい峠を越えて遠州に至る総延長200キロにも及ぶ道である。中央構造線がつくる狭隘な谷間を縫い、尾根に出て峠を越える遙かなる道。中世の頃に出来た道といわれ、その頃は抵抗が少ない最短距離のルートだったといつ。遠州、秋葉山は古代より山岳道場として修業者が入山、江戸時代には秋葉神社へ講に詣でる信仰の道として賑わい、同時に遠州から塩や海産物を、信州からは穀物や木材を運ぶ街道として行商たちが行き交うようになる。当然文化も交流し、それが現在貴重な伝統芸能として根づいている。今では旧街道をそのまま辿ることは不可能だが、分杭峠、地藏峠、青崩峠などの国境にある石碑や道端の道祖神に、その面影を偲ぶことができる。

遠州と信濃を結ぶ信仰と塩の道

「秋葉街道」に日本の原風景を見た

長野県高遠町／長谷村／大鹿村
上村／南信濃村



秋葉街道、信州からの出発点、高遠城址公園 道路脇には道祖神や石仏が並ぶ(長谷村) 中央構造線が走る大鹿村 国道から下栗の里方面へ(上村) 宿場として賑わった和田地区 商店街(南信濃村) 青崩峠から遠州方面を望む





左上 / 杖突峠から見る諏訪湖と市街地
 左下 / 蓮華寺に眠る絵島の墓地
 右 / 「峠の茶屋」で蕎麦処を経営する
 小松貴志さん

新たな魅力づくり、史跡と桜の
 ロマンチック城下町 高遠町

高遠町（人口7228人）へは茅野から杖突峠を越えて南下していくルートと、伊那市から一直線に伸びている国道を東に向かって高遠町に入るコースがある。杖突峠（1207m）は塩の道であり、江戸への道の要所でもあった。

眼下に諏訪湖と諏訪盆地を望む峠は昔も今も茶屋が数軒あり、観光客の休憩所として賑わっているが、今回の取材では、高遠町の商工会青年部に所属し、町おこしの目玉の一つである蕎麦打ち名人の青年がいるというので、取材したいと立ち寄った。手打ち蕎麦処「峠の茶屋」の店長をする小松貴志さん（23）で、開店時間より大分早く来て一人で蕎麦を打ち、大鍋に昆布やかつお節をたっぶ

り入れてつゆ作りをしている。

「2年間半、会津若松へ蕎麦修業にいつて来ました。会津には「高遠蕎麦」というのが昔からあることが分った。戦国時代に高遠藩から会津藩へ行った職人がその頃高遠にあった蕎麦を伝授して今に至っているんです」

高遠蕎麦の特徴は、手打ち蕎麦に焼き味噌、からみ大根を添える「辛つゆ」。

「商工会に協力して青年部も、高遠そばの会の育成と普及に努めています。この茶屋は茅野市に所属するんですが高遠町への入り口にも当たるので、高遠のPRもしっかりさせてもらっています」と小松青年。高遠町のパンフレットから各種土産品まで、ここで求めることが出来る。

というのも彼の父親・小松忠彦さんは商工会のリーダーで、蕎麦処「百足屋本店」を経営、日本一旨い蕎麦を町おこしにしたいと研究開発、普及に力を入れて来た。会津若松へ息子が修業に行つたのも父親の熱意に応えたいと思つたからだろう。

さて、杖突峠を下っていくとクルマで約20分で高遠町の市街地へ出る。手前の藤沢川が流れる藤沢地区は、いつ通つても家々の植木や季節の草花が大変美しい。高遠城主や飯田城主らが江戸へ往還した道だつたことから、旅人の心を和ませる家風が今も残っているのだらう。

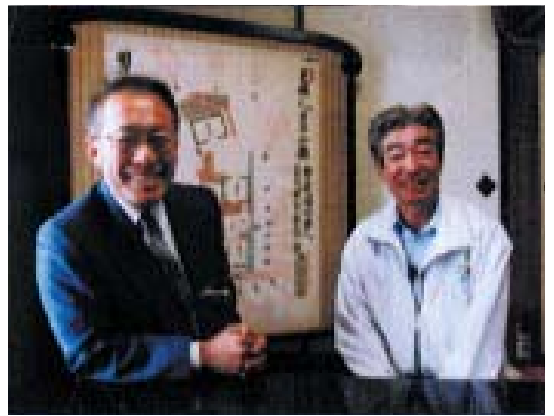
高遠町といえば、高遠城址公園の1500本のコヒガン桜が咲き誇る桜の名所としてあまりにも有名。高遠町は700年来の歴史をもつ城下町で、高遠城は戦国の若き武将仁科五郎盛信をはじめ、武田信玄、毛利秀頼、保科正光、

内藤清枚などが統治し、明治4年廃藩置県で内藤家八代180年の幕を閉じた。会津に転封になつたのは保科氏で、家臣や職人も同行



▲道路拡幅に伴い改装された高遠町の家々
 ▲桜の名所、高遠城址公園。秋はカエデの紅葉が美しい





▶高遠町観光協会平岩さんと小松忠彦さん(右)
▲人気の高遠そば
◀伝統銘菓「高遠饅頭」



し、その中には「朝寝朝酒、朝湯が大好きで」の唄で親しまれる小原庄助さんもいたよ。由緒ある寺も23寺あり、その一つ絵島の墓地がある蓮華寺へ詣でてから役場へ向かった。絵島は徳川六代將軍家宣の愛妾で大奥の大年寄りとなったが、役者生島新五郎との恋が発覚して高遠へ流刑され、28年間囲み屋敷で昼夜監視されて一人暮らし61歳で没した。復元された小さな屋敷は高遠城址公園の下にある。

高遠町観光協会平岩国幸事務局長の案内で、町づくり委員会会長の小松忠彦さんを訪ねる。

「蕎麦は昔から家庭料理で親しまれていますが、大根おろしと焼き味噌を添える。辛つゆを復元して高遠そばの会を旗揚げしました。すべて地元産のもので、現在蕎麦の栽培から製粉施設、自家味噌づくり、販売まで組織化し、18グループがあります。地粉の生産は消費量の1.5倍に達しており、最近蕎麦を食へに遠方から来てくれる人が増えました」と小松さん。

小松さんは「百足屋」蕎麦処の9代目、屋号は高遠藩の足袋屋だったことに由来するという。我々も早速蕎麦で昼食。平日だが若い女性客や辛つゆ付き蕎麦でいっぱい飲むという中高年客で賑わっている。

「高遠は桜では全国区だが、散ったあとには寂しい。桜以外に力エテの古木等が250本あり紅葉の美しさは格別なんです。意外と知られていません。人口7200人、高齢化率も35%ですから商工業の発展にも限界があります。今後は歴史のある城下町として通年観

光地として振興していきたい、そこで取り組んできたのが城下町にふさわしい新たな街並みづくりでした」

高遠町は昭和50年代に伊那市を中核とする都市的土地利用計画地区に指定され、商店街の近代化や道路整備が計画され、平成になつてから都市広域道路、公園等が次々整備され、同時に商店街の整備にも着手した。

古い街並みも時代と共に様相を変えていく中で、もう一度遺産を見直し自然と調和した街並みを再構築しようとする関係機関が検討を重ねた。道路拡張を機に城下町高遠の街並みとして検討されたのが、瓦屋根と壁の色の統一(白、黒、焦茶)、歩道の設置と街路樹や街路灯の整備、電柱の地中化、空き地を利用したポケットパークの整備など。家は和風で軒の高さを揃える、看板にも規制を設ける等の条例を設けた。町民の熱意と協力もあり、平成8年には5地区の整備事業を終了している。

「ソフト面では歴史研究会を発足し、まず自分達で地域の歴史や風土を学び、すべての住民が観光ガイドになることをめざしています。秋葉街道は高遠が起点ですので、他の村へも出かけて勉強中です。若い主婦達が大変熱心ですよ」と言う平岩さんは、東京の気象庁勤務を定年退官してUターン、観光協会でも働く。田舎の人が見逃してきたものを都会の人の視点で見直し生かしていきたいと、町内を飛び回っている。

生まれ変わった街並みを見たあと、九代目平沢優司さん、智美さん夫妻が営む高遠饅頭「亀まん」へ。北海道産の大豆、地元産の小麦・米等を使って毎朝できたてを店頭に並べる。しっとりした皮、ずっしりと重くてこくのある餡は伊那地方の人気銘菓で、町内にはこのような饅頭店が10数軒ある。

中央構造線が走る、温泉のある自然郷 長谷村、大鹿村

高遠町から秋葉街道を南に向かうと三峰川を塞ぎ止めたダム湖、三和湖が現れ、長谷村(人口2249人)に入る。この辺りは二千万年前に糸魚川と静岡を結ぶ帯状の地盤が突然隆起してフォッサマグマが形成された地域。南アルプスは中央構造線に沿って大きな断層活動が起き、その反動による大規模隆起で成立した断層山脈が赤石山脈。長谷村は仙丈岳(3033m)、塩見岳(3047m)、東駒ケ岳(2967m)の登山口になっており、山麓には宿泊施設も多い。

長谷村は古くから「入野谷」と称されて親しまれてきた地区で、国道152号線に沿って秋葉街道時代の旅籠や数々の史跡、文化財が残っている。数年前に温泉付き宿泊研修施設「入野谷」がオープンし、分杭峠まで新ハイパスが通ったが、一步旧道へ入ると秋葉街道の古いたたずまいを色濃く残す集落があり、お年寄りがのんびり買い物やおしゃべりしている。朽ちてきた旅籠などを手入れして街道として保全して欲しい地域だ。

道は間もなく分杭峠へ出る。標高1427m、粉雪が舞っている。この峠は西南日本を



宿泊研修施設「入野谷」(上)と旧道沿いに残る秋葉街道

右上 / 長谷村と大鹿村の村境にある分杭峠
 右下 / 中央構造線資料館の岩石を展示する庭園
 左 / 郡境に当たる地藏峠。峠を越すと上村になる



二分する中央構造線が走っており、地質学的にも貴重。峠を越すと大鹿村（人口1470人）になる。

大鹿村は南北朝時代に南朝勢力が拠点にした歴史の古い村で、史跡や由緒ある神社が多く、2000余年の歴史を持つ大鹿歌舞伎で知られる村。鹿塩温泉や小渋温泉があるため秘境の観光地として賑わっている。

村の中心部、小渋川の対岸には新名所、大鹿村の歴史・民俗文化を紹介する「ろくべん館」と地形地質に関する資料を展示する「中央構造線博物館」がある。各種の岩石を並べた館庭から山並を見ると、色の違った岩石が出合っている崖が見え、大断層のメカニズムをかいま見ることが出来る。ここでは河原の石も異なり、中央アルプスや伊那地方の岩石は溶けていたマグマがゆっくり冷えて固まった花崗岩であるのに対して、南アルプスの岩石は海のプレートが運んで来たサンゴ礁や海溝の砂泥で出来ていると言う。ともあれ、断層地帯は昔も今も崩れやすい地質で、木々が削り取られて利用して旅人や村人が往来したということに、秋葉街道の奥深さと自然と一体に暮らした先人達に驚嘆せ

ざるを得ない。

大鹿村からさらに南へ向かうと村境に地藏峠（1330m）がある。この峠を越すと上伊那郡が下伊那郡となり、上村となる。この峠は冬（12月中旬から4月下旬まで）は通行止めになる。今は道路も整備されたが、冬は凍結しやすい難所だ。

峠には名前のように小さな祠があり地藏様を祀っていた。素朴で微笑ましい地藏尊には花も供されており、我々も旅の安全を祈ってお詣りする。

**古き芸能文化を伝える山里
 信濃の最深部「遠山郷」上村、南信濃村**

国道に沿って遠山川が深い渓谷をつくり、その急傾斜地を耕して天に至る畑と集落がある上村（人口784人）は、自然愛好家たちが一度ならず訪ねてみたいという場所。赤石岳の中腹、標高1980mの高原にある「しらびそ高原」と、そこを下りた山岳の集落「下栗の里」は、日本のチロルといわれ、手の届きそうな目の前に南アルプスの雄峰を望み、雲は遙か下の方から立ち上ってくる。山々や渓谷には沢山の神たちが棲んでいそう、毎年12月に神々を招いて舞いを捧げる神事「霜月祭」が行われることも頷ける。

国道は一部不通であるため、しらびそ高原へのハイバスを活用、宿もしらびそ高原「ハイランドしらびそ」を予約しておいた。しかし10月中旬なのに途中から吹雪となり、翌朝は10cm以上の積雪に見舞われた。近代

▼日本のチロルと称される下栗の里で野良作業をする野牧さん



美味しい宿なので、一面の銀世界にむしる狂喜したほどだが、落葉が道路に散り、その上に雪がもつて凍っている、除雪車に誘導されながら車を走らせる。紅葉したばかりの木の葉たちが雪をかぶり、美しくも寒そうに震えている。プナやカエデの林道を約1時間かけて下山する。途中から雪も消え、下栗の里には晩秋の柔らかな日ざしが溢れていた。

廃校を利用して建設されたお洒落な簡易宿泊施設「ロッジ下栗」と、隣接して食事処&地域の伝統物産を展示販売する「はんば亭」がある。同所に木の温もりを生かして繊細に造られたセンスのいい家具や木工品が展示されていた。聞いてみると、2年前に長野県佐久市から移住して来た水嶋徳人さん・弘美さん夫妻の作品で、校庭脇にある元教員住宅を借りて家具・木工製品を製造する「山のみりや」を営んでいた。「ここの地名にふさわし



◀雪に見舞われたしらびそ高原のホテル「ハイランドしらびそ」

右 / 下栗の里の天べんにある宿泊施設「ロッジ下栗」
左 / 家具・木工工房「山のみのりや」を営む水嶋徳人さん



く栗の木を使って机やテーブルを造っています。栗は腐りにくく大変丈夫ですが、最近はこの辺りでも丸太の入手が困難です。子供や孫に合板やスチールの机でなく生涯大切に使える栗の木の机をと注文してくれる人が増えてきました」と徳人さん。二人は木曾の木工専門学校を卒業、弘美さんの女性の感性を生かして入念に造った家具は特に注目されている。

天に届く高地の畑では野牧久伸さん(84)が「10月にこんなに雪が降ったのは初めてだな」と言いながら、鹿よけの冊の手入れと大豆の収穫作業をしていた。

「終戦後は120戸あった下栗も今は62戸になってしまつてね、あの家もその下の家も空家になってしまった。暮らしやすくして便利もよくなったのになあ」と下方の家々を指さした。幸い野牧さんは息子夫婦や孫3人の賑やか一家。飯田方面に至る峠にトンネルとバイパスが新設されたため、高校生になる孫は飯田市へバス通学しているという。以前は高校入学を機に村を出て下宿し、そのまま帰らない若者が多かったが、バスで通学通勤して飯田へ通う人が増えたという朗報は南信濃村でも聞いた。

下栗の里から急峻な道を下りて国道に戻り、南信濃村(人口2305人)へ。かつて学校農園で赤石茶や椎茸栽培をすることで取材したことのある木沢小学校は廃校となり、手入れされながら残されている。木沢地区には4つの神社があり「霜月祭」が盛んなところでもある。

国道沿いの和田地区は江戸時代に秋葉詣でに行く人や、県境の青崩峠を越えて来た人や牛馬たちが休憩する宿場として街道最大の繁

華街を形成していた。今も宿屋や古いたたずまいを残し、商店街としても活気を呈している。しかし戦国時代の本来の街道はその東側の小高いところにあつたよつで、狭いが歩きやすい道の両側には古木が茂り明治時代の建造を偲ぶ蔵や土塀が現存していた。

和田地区の霜月祭の拠点である諏訪神社、梶谷川のほとりにある「せせらぎの里」(村営宿舎、天然温泉、食事処、陶芸館等がある)で一息ついたあとは、役場振興課深尾

仁さんの案内で最後の峠、青崩峠へ向かった。林道を上っていくこと約30分、峠入り口に到着した。看板と地蔵たちが建つ峠まではさらに歩いて15分ほど。

青崩峠は信州・遠州の国境を結ぶ標高1086mの峠だが、深い渓谷が迫る難所でもあつた。名前の通り鉛色に近い素肌をむき出しにしたガレ場があり、今も土砂がひっきりなしに谷間に落ちていく。現在峠の道は整備されて歩行が出来るものの車は通過できない。ここからは重なる深い山々の先に静岡県の町村が見える。天竜川沿いには東洋一と言われた佐久間ダムがあり、その下流佐久間町に秋葉神社の別院、そして春野町に火伏せの神秋葉神社本殿と秋葉神社下社がある。

峠の手前の遠山川の支流、小嵐川沿いに、秋葉街道の古道が残っていて、そこで山崎さん一家が民宿「島畑」を営んでいる。文化文政時代には塩運搬や秋葉神社へ講に行く人で



▶信濃と遠州の国境にある青崩峠 ▼観光客に人気のせせらぎの里(上)と遠山川沿いに広がる市街地



賑わい、当時から山崎家は旅籠をしていたらしい。

「明治25年1月と書かれた宿泊人名簿が残っていますが、その時の当主が十代目山崎東次郎ですから、いまは十三代目になりますね。その後宿屋をやめて飯田市の方に住んでいたこともありすが、8年前に古い民家を残しながら改築し、民宿として再出発しました」と志す子さん(95)は語る。「家は女系家族

INFORMATION

平成14年度ビデオ完成!

海の幸 山の幸

29分カラー



「大都市地域住民に身近で魅力のある観光地」をテーマに、優れた観光地づくりに努力、「都会人が求める親戚づきあい」の千葉県和田町、「豊かな地域資源を掘り起こす」埼玉県吉田町におけるさまざまな取り組みを紹介しました。

この作品をご覧いただき、首都圏から比較的近い房総と秩父地方に位置する2つの町をぜひ訪れてその魅力に触れていただきたいと願い制作しました。

なお、このビデオは全国のCATVで放映される予定です。

制作・著作 / (社)日本観光協会

「全国広域観光振興事業」

企画・監修 / 全国過疎地域自立促進連盟
制作 / 桜映画社

- ・高遠町観光協会 ☎0265-94-2552
- ・長谷村観光協会 ☎0265-98-3130
- ・大鹿村観光協会 ☎0265-39-2381
- ・上村観光工課 ☎0260-36-2211
- ・南信濃村振興課 ☎0260-34-5111



民宿「島畑」を営む母娘三代と山崎家の屋敷内を通る秋葉街道(下)



なんです」と言うように、全体を切り盛りするのはその娘のきん子さん(70)、料理人として腕をふるうのはさらにその娘の登支さん(48)。親子孫3人の女性は若々しくて魅力的。登支さんのご主人は役場勤めで息子と女の子が一人づついる。「次は僕がやるよと長男がいつているんです」と登支さんは笑う。一家は田んぼ、畑、山菜に至るすべての農産物を有機栽培し、客には目の前の川で捕った

編集後記

今回取材したのは、江戸時代に栄えた街道の宿場町。その多くは、鉄道や高速道路などの新たな“道”ができることによって寂れてしまっていた。町の盛衰が道によって左右されることを痛感した。そんななか、前向きに地域おこしに取り組む町もあった。「かつて宿場町として人が集まったように、また違う魅力で人が集まる場所にしたい」と語った町の人たちの言葉が印象に残る。(〇)

山間部の古道に立つと、幾風雪に耐えてその地に息づいてきた自然と人間の共生に改めて驚嘆し、往来する旅人の姿や迎える農民の姿が浮かんできたものである。旅人の多くは農家の軒下で仮眠し、そんな人には茶湯を出したと言う。「桜が咲く頃になるといつもの商人が“また来たよ”とやってきて干物や生地、椿油など上げるの、それが待ちどうしくてね」と言っていた老人の言葉を思い出す。厳しかった冬が終わって待望の春。村の街道が賑わい活気づく日を夢に見たい!(A)

De POLA No.24

[でぼら] 2003年春夏号

発行日 / 平成15年3月5日

発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい

編集工房アド・エー

魚を調理する。この地方伝統の鹿や熊肉なども炭火焼き等でいただくことができる。「ここ八重河内地区には20戸ほどあり、ほとんどの家が旅館をやっていたんですが、やがて辞めて出ていってしまい、当家だけが残りしました。ここへ来たお客さんは釣りや山歩きがたつぷり楽しめると言って毎年利用してくれます。田植えや稲刈りを手伝わせてと一週間以上滞在するご夫婦もいます」ときん子さん。

家の隣には一階が牛馬の厩、二階が旅人の宿に使われて来た建物が納屋として保存利用され、向いには古い蔵がある。その間のちよつとした敷地が実は街道だったそうである。その道を河原の方へ行くと、あぜ道風の道は石段や丸太で歩きやすく整えられていた。

秋葉街道は先人たちの往来だけでなく、宗良親王や武田信玄の軍が風林火山の旗をなびかせて通過した歴史の道でもあった。

神々が棲み、地球のうねりが聞こえるようなこの地に立つと、川岸から峠の方から、人々のざわめきや荷車の音が聞こえてくるようである。

遠州の秋葉街道

青崩峠は現在峠の下を通るトンネル工事を実施中で、遠州に向かつては南信濃村の市街地から国道で平岡町へ出る。峠の下・遠州側にある水窪町は名前の通り、天竜川と水窪川の谷間にある町で、樹齢1250年の老杉の立つ山墨神社、奥の院の常光寺山をはじめ、西浦田桑(国指定重要無形文化財)が有名。秋葉神社や秋葉街道に深く関わって来たのが鳳来町(愛知県)の大野宿。大宝3年(703)に創建した古刹・秋葉神社の参道と、豊橋から物資を運んで奥三河へ行く別所街道の交差点点にあるため、古くから宿場町として賑わった。連枝格子を立てた若松屋、山形屋、鍵屋等の大きな旅館があり、一部を公開している。勝負坂を経て秋葉神社に向かう上り坂にも宿坊風の民家が並んでいる。

かつては修験道の聖域とされた秋葉山、その麓にある秋葉神社は今日でも参拝者で賑わっている。海岸に塩田があったという遠州灘もここから遠くに望むことができ、街道が「塩の道」と称されていたことが頷ける。

文 / 浅井登美子 カメラ / 小林恵

宝くじ

スウィートで

あまのきゅきゅ

じわじわ、いっばい、
あります。

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として
作成されたものです。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人日本宝くじ協会

皆さんはしっかりと買って、しっかりと遊ぶ。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●本誌発行の宝くじも、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。